

英国ワクワク旅行

中西桂子著



はじめに

私がイギリスに行きたいという気持ちを強く抱いたのは、ピーター・ラビットの著者「ビアトリック・ポター自叙伝」の映画を見たことによる。今も美しい湖水地方の自然を、この人が守ったのだと知り、その美しい景色に思いを募らせ、ガイドブックで調べ、個人旅行を強行した。

この本を出版しようと思った理由は、満足に英語が出来ない60代の2人が、レンタカーを借り、1か月の旅が出来たという達成感と満足感を形にしたいと思い記憶をたどって日記にしました。



「英国ワクワク旅行」

中西桂子

2011年6月25日（土）

英語が話せない私たちは、海外空港での乗り継ぎに不安を感じ、少し高いけれど成田からの直行便にした。時刻、ヒースロー空港（Heathrow Airport）到着。イングレの係員は書類を手に、

「One month?」（1ヶ月）と

ひと言発し、私たちの顔を見た。あまりにも簡単な英国上陸第一歩に喜んだ。

さあ、ワクワク旅・弥次喜多道中の始まりである。

パディントン駅（Paddington）へ行くエクスプレス・ターミナルまでは観光案内本によると10分弱だ。しかし、地下鉄方面へ行ってしまう。間違い第一号。少し戻って、右折してターミナルを見つけた。

切符の買い方は勉強していたが、自販機の使い方が分からない。持参の旅本で調べようとしていると、タイミンク良くイミグレで会話した日本の青年が目に入った。

「キップ買って!」

入国最初の厚顔で頼んだ。無事「片道・自由席」をよ1

8でゲット。青年たちは間違つてここに来たのだそうだ。

1時間は掛かるけれど地下鉄でロンドン市内へ行くと言う。私たちは、日が暮れない内にホテルに着きたいので、乗車賃は高いが、急行に乗った。

「やや? こっちは急行なのに」

私たちの列車は、隣のレールを走る列車に次々と抜かれていく。

「間違つたのか?」心配だ。言葉の懸念など頭から消え、近くの人に、

「Is this train to Paddington?」（この列車はパディ

ントンに行きますか?）

と尋ねると「Yes」と、返ってきた。ついでに、

「How long does it take?」（どれ位かかりますか?）

25分だと言う。本には15分で行けると書いてあるのに、まあ、いいか。

パディントン駅の1番端のホームに着く。ホテルの場所をインフォメーションで訊いたがだめだった。安価で駅に近いホテルをネットで申し込んだのだから仕方がない。地図を開いて通りの名前を探し、おおよその見当をつけ方向を決めた。スーツケースを引きずって、石畳の

ガタガタ道をホテルまで10分、やっと到着した。ホテルは地下鉄ランカスター・

ゲート駅 (Lancaster Gate) の近くにあった。小さなカウンタ―に、

普段着のお兄さんが一人いた。ネット

トで届いた「英語と日本語の確約書」を持参している。それをお兄

さんに渡してチェックイン完了。

しかし、ネット予約のホテルは心配であ

る。その不安が的中。私たちの部屋は中二階で、狭い。

それに窓が低い。とくに外から入ってこれそうな窓がとても怖い。

ホテルで1日乗り放題 (¥24) のバスのチケットを奨められた。明後日は雨だから明日にしまさいといわれこのチケットでロンドン最初の市内観光に決めた。まだ日は暮れない。水を買いたい。近くのハイドパークも見たい。好奇心がムクムクと湧いてくる。

ホテルから100メートルほど歩くと、ベイズ・ウォー

ター・ロードに出た。向こうに見えるハイド・パーク



に池が広がり、たくさん植えられた木々の中に小道が伸び、犬を連れて人たちが散歩している。ケンジントン宮殿 (Kensington Palace) は見えませんが、地図上の標識を見て方角を確認。今は想像するだけで納得した。それにしても広大な公園だ。

ここは地下鉄の駅も近いし、静かな公園もあるので、ホテルがもう少ししければ好立地なのだが。近くにはスーパ―もあり、小さいけれど土産、果物や飲み物などが棚にいっぱい。

「これこれ、見て。日本から輸入しているー」と私たちが話していると、店員が、

「これ、これ！」

と、真似して笑う。英国人は楽しい。イギリス土産のチエック柄のウォーカー (Walkers) が、何と兵庫県から輸入されている。驚きだ！来たばかりなのだが、帰りに、これをお土産にしようと思った。

3日分の水と生野菜などを購入した。そして近くを散策しホテルに帰ってきた。

日本から持参した炊事器具でご飯を炊き、トマトのサラダ、缶詰、漬物の素を利用しキュウリの浅漬は、イン

スタントの味噌汁などを作り、ホテルの部屋で豪勢な夕食となった。

バスタブが無く、シャワーで我慢。洗濯もした。そして窓から人が入れないように椅子で工夫した。怖い怖いと思いながらも早々と寝た。いつの間にか爆睡していた。やはり、怖いもの知らずの歳になったようだ。

6月26日(日)

朝食はホテルのバイキング。簡単なスクランブルエッグ、ソーセージにチーズ、パンなど。日本でも朝食はこんなもの。これでも、私が最初のヨーロッパツアーで食べた朝食より良い。

ランカスター (Lancaster) 駅からバスに乗り、途中で一日乗り放題バスに乗り換えた。そのバスではイヤホンと地図が配られ、いろんな国の言葉が聴けるようになっている。壁の各国の旗を描いた所にイヤホンの差し口がある。日の丸に差すと日本語の案内が流れてきた。ヨーロッパは観光に力を入れているのだろう。我々のような英語が話せない観光客には、とても便利で親切なシステムで、素晴らしい工夫だと感心。

私たちはビッグ・ベン(Big Ben)

のチームズ川近くで下車。以前はバスの中から頭を横にしても、イギリスを象徴するビッグベント塔が見えず、「あつ」という間に通り過ぎてしまったので印象が良くなかったが、また来られてよかった。



「再び来たぞ」

と叫びたくなった。イギリスのランド・マークであるビッグベンや、以前はなかった世界最大といわれる観覧車のロンドン・アイ (London Eye) などを橋の上から撮影した。

次に時間を気にする場所へ。11時30分から始まるバッキンガム宮殿 (Buckingham Palace) の衛兵の交代式を見るために急いでウエストミンスター寺院の前を通りかかると、そこは日曜で休み。ウィリアム王子とキャサリン妃の結婚式の写真が貼ってある前を通る。どうやら迷ってしまったらしい。宮殿に行く道を尋ねた。

「Where is the Buckingham palace?」 (バッキンガム

宮殿はどこですか？

左の方に行けば良かったのだ。ヨーロッパは放射状になった道が多い。

ヴィクトリア女王記念の金色の天使像が建つ宮殿に着いた。溢れるほどの観光客が、塀の間からカメラをいれて衛兵の交代式を撮っていて、私たちも人をかき分けて撮影する。赤い上着に熊の毛皮で作った黒い帽子、衛兵のきびきびした動作が美しく、まるで機械仕掛けの人形を見ているようで、おもしろい。

衛兵が門を出るのを見て、私たちはプラタスの木々が茂る公園の長——く広い儀式用の道路『ザ・マル』

(The Mall) を歩いた。優美な曲線を描く宮殿の正門の「アドミラルティ・アーチ」(Admiralty Arch)を抜け、トラファルガー・スク

エア (Trafalgar square) へ。ここは

ネルソン提督が戦争に勝利した記念広場で、高い円柱の上にネルソン像、中心に噴水が出ている。スクエア前の通りに「フィッシュ&ポテト 4」と

価格を書いた看板。高級感のある店なのに



客が少ない。お昼もかなり過ぎ、お腹がすいていたから、看板につられて店に入った。フライの魚がデカイ、これがイギリスで有名なランチの食べ物かと味わう。味は普通だが大きな天ぷらなので、お腹は満腹。紅茶で一休み。ここで初めてのチップを間違えて弾んでしまった。カッコよく

「Keep the change! (お釣りはとっておいて)」と、言いたかったが。

次は2階立てバスの2階席で大はしやぎ。跳開橋のタ



ワー・ブリッジ (Tower Bridge) を歩いて渡りたいしロンドン塔の王冠を見るのが楽しみた。バスを橋の手前で降り、橋と塔を撮影する。

「これもイギリスの景

色だ！」

私はこの橋を

「ロンドンブリッジ」

だと思っていた。あの歌にある

「ロンドン橋落ちた」の橋は西にあるという。

タワー・ブリッジの2階の北塔に、大きな船が通過する時の開閉時間が書いてあるという。私たちは何度か色々の場所から橋を見たが、一度も開閉を見ることはなかった。

ロンドン塔(Tower of London)の名物である世界最大、530カラットのダイヤモンド「偉大なアフリカの星」を見るため、長い列に並ぶ。黒い帽子に紅いマントの制服を着たビーファイター(護衛兵)が警備している。

この塔は牢獄、処刑にも使われた場所だという。

ヘンリー8世の2番目の妻アン・ブーリンが、女の子を出産、次の男子は流産した。ヘンリー8世は男子の王位継承にこだわり、新しい妻を迎えて男子を望むが、離婚は宗教上許されない。そこで、アン・ブーリンを無き者にするために彼女が先妻の娘の暗殺を企てたと言いがかりをつけて処刑した。その亡霊が出ると噂されている。

ヘンリー8世は6番目まで花嫁を変えたが結局男子の子継ぎには恵まれなかった。処刑されたアン・ブーリンの子供が後のエリザベス1世だという話をテレビ番組「世界不思議発見」で見た記憶がある。

それにしても、豪華な王冠は女性の憧れだが、ダイヤ

モンドは何かを秘めているような冷たい輝きを放っているように私には思える、こんなに大きなダイヤモンドの王冠をかぶって見たいものだ。

ロンドン塔前のテームズ川岸からクルーズの目的地である対岸の「ロンドン・アイ」(British Airways London Eye)までのわずかな移動は、バスの乗り放題乗車券が利用出来る。栈橋には船に乗る人が沢山待っている。世界最大というロンドン・アイも人が多く並んでいた。切符を購入したら次の部屋で写真を撮られ、その隣室で3Dの映画も見た。それが終わると先ほどの私たちが写った写真入りのマグネットを購入入させられた。

ゴンドラに乗る時間がチケットに書いてある。19時だから、カプセルの中から見る夕日に期待したけれど、21時以降でなければ日が暮れないらしい。ゴンドラのカプセルは20人乗りだが、乗ったのは10人位。「シテイ



ホール」、弾丸型の建物「スイス・リ・本社ビル」や傾

いた特異な外観の「ロンドン市庁舎」「ビッグ・ベン」など、ロンドン市内を眼下に1周30分を楽しんだ。

日も暮れて、ホテルへ帰るためにタクシーを探すが見つからない。たくさん走っているけれど、空車のランプはどれだろう？ ウェストミンスター寺院近くの建物の守衛にタクシーの乗り場を尋ねようとする。

「止められないのか」

とでもいうような言葉を発しながら椅子から立ち上がり、タクシーを止めてくれた。タクシー代(£12)を払いやつとホテルに着いた。地図を熟知していれば地下鉄サークル線(Circle)のウェストミンスター駅(Westminster)から、ベイズウォーター駅(Bays water)まで乗り換えなしで帰れたのに。

「まあ、いいか」

夜はタクシーの方が安心と聞いていたから。

今夜も日本から持ってきた食材で夕食、そして洗濯

6月27日(月)

アダルト切符£10(地下鉄の一日乗り放題)でベイズウォーター(Bayswater)駅から地下鉄に乗りデイス

トリクト線(District)のアールズ・ポート(Earl's Court)で乗り換え南西部にある世界で最も有名な植物園キュー・ガーデンズの駅(Kew Gardens)まで1時間もかからなかったと思う。駅から閑静な住宅を眺めながらキューガーデン王立植物公園(Royal Botanic Gardens Kew)まで真っ直ぐに5分。開園まで少し待ち£13を支払って入園。

池やいくつもの温室(パームハウス、コンサバトリ、東洋風バガダ、テンペレートハウス、スイレンハウスなど)があり、世界各国3万種、700万点以上の植物がレイアウトされている。バラはもう終わっていったけれど、名も知らない花々が咲き乱れている。近年、日本でもガー



デニングブームでよく見る花も多い。日本ガーデンもあり、私たちはゆつたりと散策。途中、「オランジュリー」テイルームで庭を眺めながら休憩。公園の奥にある建物に展示されたボタニカルアートもすばらしい。

駅に向かう帰り道、女の人がカフェテラスで、ポテトにチーズを乗せて食べている。

「美味しそう」

釣られて入ってしまった。英語の本を見て注文すればいいのに思いつきで

「マダム eating same dish」(女の人と同じもの)と単語ばかり。しかもフランス語混じり。それでも解ってくれたのか

「Mat topping would you like?」(何のトッピングがお好きですか?)

とメニューが出される。チーズ乗せポテトと野菜のキッシュ、それに暑くて喉が渴いていたのでコーラを注文した。ポテトは丸々、ほかほかで、チーズはとろとろ。

” 美味しい！ ああ、至福のひと時 ”

ここからハンプトン・コート宮殿に行きたいが地図だと、もう少し下に進めばいいが乗り物がわからない。タクシーを使う自信もない。諦めた。

デイストリクト線に乗り、今度はウィンブルドン・パーク駅 (Wimbledon Park) で降りた。今、テニスの世界大

会が開催されているけれどその建物が見つからない。

この大会では試合や練習の際は白いウエアの着用が義務づけられているらしい。

センターコートの試合は見られないが入口まで行ってみようと思った。しかし、長い列で建物も見えない。

諦めて行列をパチリ。そこに日本の青年が、明日の試合を観戦するためテントを張り待っている。

「おばちゃん5時からだと入れるかも」

と、言ってくれたが、余りにも長い列！ 並ぶのは諦めた。今から思えば

「我慢して見ておけば良かったかな？」と後悔がチョッピリ。

帰りは降りた駅ではなく、サウスフィールド駅 (Southfields) へ行っった。

(2012年オリンピックをテレビで見た時と駅名が違っていて駅までの道は高級住宅街でした。) いつかもう一度来て確かめたい。そしてテニスも観戦したい。



一日乗車の切符を持っているのだから使わなければ損

だ。今度はサウスフィールド (Southfields) 駅から乗り、次のデストリック線のタワー・ヒル駅 (Tower・Hill) での乗り換えは、駅の外へでる。モノレールのようなドックランズ・ライト・レイルウェイ(DLR)で、20分位かけて世界標準時刻を示す子午線上に建つグリニッジ天文台 (Greenwich) へ。

駅から歩いたが遠い。天文台は丘の上に建っている。しかも、遠回りを教えられたため16時30分の閉館時刻を過ぎてしまった。天文台には「世界標準時・グリニッジ標準時」の経度0が南北に走っていると聞いている。今は天文台として機能していないと言う。塀の向こうでは人々が子午線をまたいでいる。よく見ると外に子午線が伸びている印があり、それを背景に自分たちも入れて写真撮影し、帰路に着く。

帰りは乗り換えが容易なバンク駅(Bank)を教えてもらい、簡単にホテルに帰ることが出来た。そして、いつものように最初の日にスーパで買ったものなどで夕食。明日に備えて就寝。

6月28日 (火)

今日は朝早くホテルから公園の中を歩いてケンジントン宮殿 (Kensington Palace) へ行く。池の回りに白鳥が沢山集まっっていて、道に落ちてゐる糞を掃除する車が、近づく、習慣なのか、すぐ池に入り、車が行き過ぎると池から出てくる。泳いでゐる白鳥は優雅で美しいけれど、陸にあがり、身体を振りながら歩く姿は品がない。

入館時間だと思ひ宮殿の前へ。ケンジントン宮殿のサンクン・ガーデンは左右対称のイタリヤ式ガーデンで手入れが行き届いている。小さいが、とても美しい庭で、今を盛りに咲く花々で埋めつくされている。このサンクン・ガーデンは、ホテルから歩いてすぐだから、何度も来た。あるときは、ガーデンの周りにベリー



のような木で作ったトンネル道がクリスマスツリーに飾る丸く紅い球で飾られていた。

チャールズ皇太子と故ダイアナ妃も、綺麗な庭を眺めて心を休めていたのだろうか。

宮殿の一部が一般公開されているが、内部に入るにはまだ早かったので、昔の王女が好んだと聞いたオランジェリ・テイルームでお茶を味わう。

内部には正面玄関からではなく、地下鉄クイーンズウエイ駅 (Queensway) から建物と庭の間に入る。売店でチケットを購入。この内部は撮影禁止。豪華な部屋天井画、王妃の間、ダイニングルーム、沢山の宮廷ドレス。

おもちゃも置かれ、王室の優雅な生活の様子が、うかがえる。

土産コーナーに王室ゆかりの品が並べられている。王室カラーなのか、薄いグリーン色に金を配したカップ、皿、紅茶などが売られている。

もちろん私も購入。

正面玄関の門に廻ると、日本のご夫婦に出会い、門をバックに



私たちのツーショット撮影をお願いする。この門の前がダイアナ妃を追悼する花で、埋まっていたのをテレビで見たことがある。

ここから公園を斜めに中央位まで進み、車が通るサーペンタインブリッジ (The Serpentine Bridge) の近くにあるダイアナメモリアル・ファウンテン (Diana's Memorial) まで歩く。そこは王妃を追悼する記念の泉、芝生の中をコンクリートで造った川が流れている。

この辺はダイアナ妃のお気に入り場所だったという。何を思い散歩したのだろう。女性の憧れと言われる王室、そこでの大変さは一般人には解らないが、どこの家にも苦労はある。もう少し子供のために我慢してほしかった。若すぎて、女性として生きたかったのかも知れない。どちらもお金持ちだからね。最後の言葉は

「Leave me alone」(私を一人にしておいて)。
パ・パ・ラッチにも王室にも言いたかったのではないだろうか。

ダイアナメモリアル傍のサーペンタイン・バー・キッチンは、後で知ったが本に載っていてパンが酵母ででき

ているという店があると言う。私たちが入った店だったのかな？。沢山パンが並べられたパーク・カフェ (Park Cafe) でサーモンサンドと、イングリシユティでランチしていると雲行きが怪しくなった。雷が鳴りだしピーターパンの像を見ながらホテルまでの道を急いだ。

ホテルで雨が止むのを待ち、次のホテルへ行くために£20でタクシーを呼んでもらうが、どうやら白タクのようだ。

運賃をぼったくられたかな？

今度のホテルはラッセル・スクエア駅 (Russell Square) の近くだが有名ではないらしくタクシーも迷ってしまい、ホテルの玄関まで行かずに降ろされる。プレジデントホテル (President Hotel) は意外に良くてバスタブもあり安心した。

雨が止むのを待つて、旅行会社HISへ行くことにした。歩いて行ける距離だと訊いたので、どんどん進むとトラファルガー (Trafalgar Square) まで来てしまった。三越デパートの近くだというのが迷う。やっと、閉店間際

のHIS店に着き、急いでツアーやエディンバラからの帰りの列車を予約してもらった。

ホテルへ帰る前に、明日のツアーの待ち合わせ場所と行き方を調べに行った。私たちのホテルからは乗り換えなしでピカデリー・サーカス (Piccadilly Circus) 駅のエロスの出口から出れば良いと確認する。

エロス (Eros) の像は階段の上にあり沢山の人の待ち合わせをする場所で有名。ここからホテルまで歩いて帰ることにした。しかし、また迷ってしまった。歩いてる人に訊いても知らない。他のホテルで訊けば同業だから分かる

と思い、カウンターのボーイに尋ねると

[turn to right] (右に曲がる)

「右」

の英語だけ解つたのでホテルの外へ出てから道を右折するのだと思ったら、ここを右にと手を指してくれた。ドアを開けると、またドア。開くと、そこは私たちのホテルのロビーで



「ええー！」と驚きだ。

夜、お風呂に入ったとき、私たちがホテルを訊いたホテルの名前が石鹼の包み紙に書いてあった。同じ経営なのだろう。

明日は早いので、ここから乗るラッセル・スクエア駅までの道順と、切符の買い方の確認に行く。3分位歩くと駅に出た。日本語で操作できる券売機があり安心。

水を買いたいが、この辺のスーパーが判からない。ホテルにある自販機の水は小さいのしかない。やむなくバーで買ったが高かった。小さいボトル3本買う方が安く量も多く得したのに。今日、道に迷いながら歩いてホテルに帰り地下鉄£4をケチったのが、パーになった。どこか間が抜けていると二人で大笑い。

6月29日(水)

5時にモーニングコールを頼んだが、3時ごろ同室者の寝言に起こされ5時まで眠れない。

ツアーに参加するので早く食事をしたい。けれど食堂は7時から。朝食が始まると早々に済ませホテルを出発。

昨日、練習したのに切符が買えずにいると、手助けの人がすぐに飛んで来てくれる。ラッセル・スクエア駅のエレベーターはドンンドンと下に降りていく。ピカデリー(Piccadilly)線に乗り、降りたピカデリー・サーカス駅でも長いエスカレーターを2度乗り換えた。そこでは海外で良くみる光景、エスカレーターに乗りながらキスをしている。私の娘なら頭を叩きたい。感情の入ったハードで長い口づけだ。この駅で何度も、こんな光景を見せつけられた。暇だからかな！

三越デパートのツアー集場所には、まだ人が集まっていなくてホットする。日本人ばかりのツアーでロンドンから南下する。

リーズ城 Leeds Castle &

Garden) は「イギリスで最

も美しい」といわれ、水面に綺麗

に写っている。何人もの王妃が

居住したため

「貴婦人の城」

とも言われている。



城の開門時間まで庭園を鑑賞。ラベンダーなど、色々な花が植えられた城の周りには川や森、野鳥園があり家の間を抜けると葡萄棚の下、イチイの木の迷路のようなガーデンでコテージ、スタイルのカルペパー・ガーデンと言う庭を眺めながら歩くが、写真を写す時間がとれない。

それでも皆に遅れながら綺麗な庭を撮影。開門の時間になり、橋からリーズ城に入る。女王の部屋、噴水のある中庭、図書室、ベリー夫人の娘たちを描いた絵画が架かった女性らしい明るい部屋から川が見え、高級な調度品が置かれている。低い建物で、城ではなく避暑地の別荘のよう。

昔の城の居住者ヘンリー8世の妻キャサリン王妃の侍従が第二の妻アン・ブーリンだったので、1111でいたのでは、と言われている。

この城は、ロンドンのヴィクトリア駅 (Victoria) からバスステッド駅 (Barnet) まで1時間で来る。駅に送迎バスがあるというので当初、リーズ城と次に行くイーストボーンへは個人で列車で来ようと計画していたが、その次に行くカンタベリーと合わせて1日で3か所観光出来るという。ツアーに変更した。時間短縮ができて良かった。

バスで移動中、フロントガラス越しに、白い石灰岩の美しい断崖が目に入ってきた。断崖が7つ連なる風景を7人の聖女に見立て、「セブンシスターズ」(Seven Sisters)と言われている景勝地の「イーストボーン」(Eastbourne)。丘の上にイーストボーン城が佇む。断崖の白と海の青が

数10キロにわたり続いている。

海と空を背景にした断崖の色のコントラストがとても綺麗。美しいビーチの近くにはホテルが並び、リゾート地になっているらしい。何と海はドーヴァー海峡

(Strait of Dover)

よくニュースでドーヴァー海峡を泳いでフランスに渡ると聞く。天気は快晴。かすかにフランスの地が見える。こんなに遠いのに泳ごうと思う意欲に敬服する。打ち寄せる波に以前に行ったフランスに思いを馳せ、丸くなった石を記念に拾った。が今その石の所在が判らない。



そこからバスに乗り、カンタベリーに着くと

「各自急いで食事して」

と言われ、イタリア料理のスパゲッティとピザを2人でシェアして食べる。

カンタベリー (Cantebury) 大聖堂は、英国国教会の総本山で、昔、王室と教会の権力争いがあり、聖堂内で司教が殺されたらしい。その遺骨には奇跡が起こるという伝説が広まって聖地になり、沢山の巡礼者が訪れるのだという。ここでは大聖堂のステンドグラスが必見。

次は、先日、自分たちで行ったグリニッジ天文台。今度も天文台に入れず。子午線が外に引かれている事をツアーの添乗員が説明しないので、私が教えると、ツアー客が写真を撮りにいった。

丘の上から真つ直ぐ下がるとテームズ川。その傍で船が造られている。大英帝国時代にインドや中国からお茶を運んだ船、「カティ・サーク号」が火事で焼失したため、今それを修復している。

その下の乗船場からテームズ川を船でロンドン市内の地下鉄エンバンクメント (Embankment) 駅まで帰る。朝、ホテルのブ렉ックファストで頂いたゆで卵を食べながら、

船上で心地よい風を楽しんだ。タワー・ブリッジの下を通った時、この橋を歩いたのだと感動！。

エンバンクメント駅はビッグベンの手前だった。ナショナルギャラリーは今日、遅くまで開いていると言うので歩いて行ってみたがクローズだ。仕方なくコンビニのような店で夕食を簡単にすませる。2階建てバスで帰る事にした。教えてもらった91のバス停で切符を買う。

イギリスではバスの中で切符は購入出来ない。バス停に自動券売機があるけれど、紙幣は使えないし お釣りは出ないと、私たちは前もって勉強していた。

91の数字のバスの2階に乗り楽しんでいたが、降りるバス停が判らない。

「この辺だった、違う？」

迷っているとキングクロス駅 (King's Cross) に到着。行き過ぎたので向こうからくる同じ数字のバスに

「乗り換えよう」

と言ったが、友人は



「一周するから」

という。しかし、進むにつれ背広姿の乗客が段々と降りて行き、仕事着風の客が多くなり、ちよつと怖そうなお雰囲気になった。やつと

「尋ねよう」

と言いだした。

「I'm lost. I'd like to go to Russell square?」

(迷いました。ラッセルスクエアへ行きたい。)

若い青年に訊いた。このバスは向こうでストップだからすぐに降りなさい、とジェスチャー混じりで言う。次のバス停で降り、反対側へ行くと、バス停で待っていた人が変だと思つたのか、話しかけてきた。私はさつき車中で使つた英語で答えた。すぐに同じ数字のバスが来たので乗る。さきほど、話しかけてきた人が運転手と話している。しばらく乗つてこの辺かなと思つてみると、運転手が私たちに降りるように合図をしてくれる。さきほどの人が頼んでくれていたのだと

「感謝 感謝の極みです」

その人はもう降りていない。

バスは地下鉄駅とは違ふ所に着いた。ホテル到着は、うす暗くなつた21時近く。長い一日だつた。

6月30日(木)

この国では大英博物館 (the British Museum) とナショナルギャラリー (National Gallery) は無料で入れる。だから何回も行こうと博物館の近くにホテルを取つたのに、未だに入館していない、いよいよ今日徒歩で行く。

10年前ここに來た時、ピーターラビットの初版本が展示されていたし、イミテーションだといつていたが、ロゼッタストーンがそのままドンと置かれて写真を撮れた。今はガラスの中。今回は展示が少ない。何もかもが小さくなつた感じがする。世界最大の博物館の建物は、イオニア式列柱に支えられた今も荘嚴な外觀だが、何か物足りない。エジプトの物ばかりを観たという感じがた。以前には無かつた丸い白い建物、透明の屋根でおおわれたグレート・コートが建てられていた。そこで食事ができる場所があるらしい。私たちはその建物に行かずに次に進む事にした。

明日はロンドンを離れるため、HISで頼んでいたエディンバラからの帰りの列車のキップをもらいに行く。そこで、今までに写した写真をCDログにしてくれる場所がないか尋ねると、ピカデリー駅エロス像 近くの菓

局でもしてもらえると言う。自分でDVDに操作するようだが、お姉さんに

[help me] (手伝って)

と頼んだ。300枚入るチップを2枚持っていたけれど、1ヶ月の旅だ。沢山撮りたいし心配だったが、これで安心。DVD5枚に入る。

ここからナショナル・ギャラリー (National Gallery) が近いから行く。ナショナル・ギャラリーは、トラファルガー・スクエアの北側に面した広場に建っていて、正面玄関より入ると時代ごとに絵画が4棟に分けて展示されている。

誰もが知っているフェルメール、ラファエロ、ルーベンス、セザンヌ、ドガ、ゴッホ、まだまだ沢山の画家の絵画がある。そして、印象派モネのサンラザール駅の12枚連作の一つや、また、私の好きな画家シスレーの作品などを鑑賞。よくこれだけ有名な作品を集められたな、と感心する。それに写真を写すことが出来るのは、どうしてだろうか。日本では作品の傍によれば叱られる。不思議だ。またイギリスは、小さい頃から鑑賞力を養ったために入館を無料にしている。素晴らしい国だ。

お土産コーナーで有名な絵画を張り付けたボールペンを沢山購入。

美術館を出ると、アドミラルティ・アーチの所に警官が沢山いて、ビッグベン方面からデモ隊が、こちらに歩いてくる。カメラの報道人もいて私たちも映るように歩いたのに、その日のニュースを見るのを忘れてしまった。

このデモは、私たちが帰国してからも、ロンドンやマンチェスターなどで暴動になり、バスなどを焼いたりし荒れた。日本に帰ったとき皆に「早く帰って来て良かったね」といわれた。



トラファルガー・スクエア広場は憩いの場になっていて、中央に噴水。2対のライオンが道に向かって座っている。日本橋三越の前のライオンはこれをモデルにしたと言う。皆が乗っているライオンの台に友人が乗りたいと言うので、お尻を押したが滑って登れない。それを見て親切な人が引っ張ってくれた。やさしい人ばかりだ。

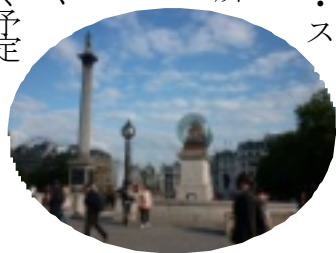
我々はこの場所トラファルガー・スクエア広場によく来た。

ここはイギリス人の自慢の場所かも……

7月1日(金)

今日は列車でパディントン駅から、

オックスフォード (Oxford) へ行く予定だ。



朝食に行くと日本人の男性1人に出会い、

「日本人に会うとホットしますね」

と会話した。その方もツアーでオックスフォードとコッツウォルズ(Cotswolds)に行くと言う。

私たちも食事を済ませ、タクシー£12を払い、パディントン駅まで行き窓口で

「To Oxford What time? Platform number?」 (オックスフォードへ。何時に。プラットフォームは?)

£52で切符を購入できた。プラットフォーム(10番)に行く列車が着いている。最後尾は1等、私たちは次の車両の2等車に乗り込むと、すぐ出発。

私たちが訊いた8時22分と違う。この列車で良いの

か? 傍にいたおじさんに

「Is this train to Oxford?」 (この列車はオックスフォードへですか?)

と訊くと大きな眼を開き、

「オックスフォードかい?」

とでも言うように

「オ」

にイントネーションを置き、

「グイ」と見詰め返してきた。私が関西弁でしゃべり、

関東弁でアホにされた気分だ。

そう言えば地下鉄ピカデリー・サーカスもイントネーションがおかしく聞こえた。日本に帰ってから英語の

先生に訊くと、名詞は前の母音にアクセントが入ることが多いという。

この列車で良かった。

私たちが切符売り場で訊いた時、もう間に合わないと思つて次の列車の時間を教えてくれたのだと思う。ロンドンからオックスフォード方面の列車は1時間に2本出ている。

私の座席がなく、スーツケースの置く場所には先に置かれて私たちの置く場所が無い。

日本では空港に行く列車にはスーツケースの置き場所があるが、それ以外には付いてないと思う。

数駅過ぎると並びの席が空き荷物も置けた。トイレは、日本より綺麗。



1時間位乗り、着いたオックスフォードは田舎の駅で、駅前には商店街がなく、ガランとしている。

駅裏にレンタカー店があるので、裏の改札に出たいが閉まっている。表の改札は荷物を持つて歩道橋を上らないといけない。思案していると、娘さんの留学先に遊びに来ていた日本人家族が尋ねてくれたが乗客の多い時ではないと開かないという、歩道橋へ上るエレベーターを見つけて助かる。どこにでも日本人が居るものだと言った。

地図をもらっていたレンタカー店は私の思った通りの場所であり、

「We have a reservation for a car today but we'd like to go sightseeing. Would you keep the baggage?」(私たちは今日、車を借ります。観光したいので荷物を預かってください。)

とお願いすると部屋のドアを開けてスーツケースを運んでくれ、預かってくれる。

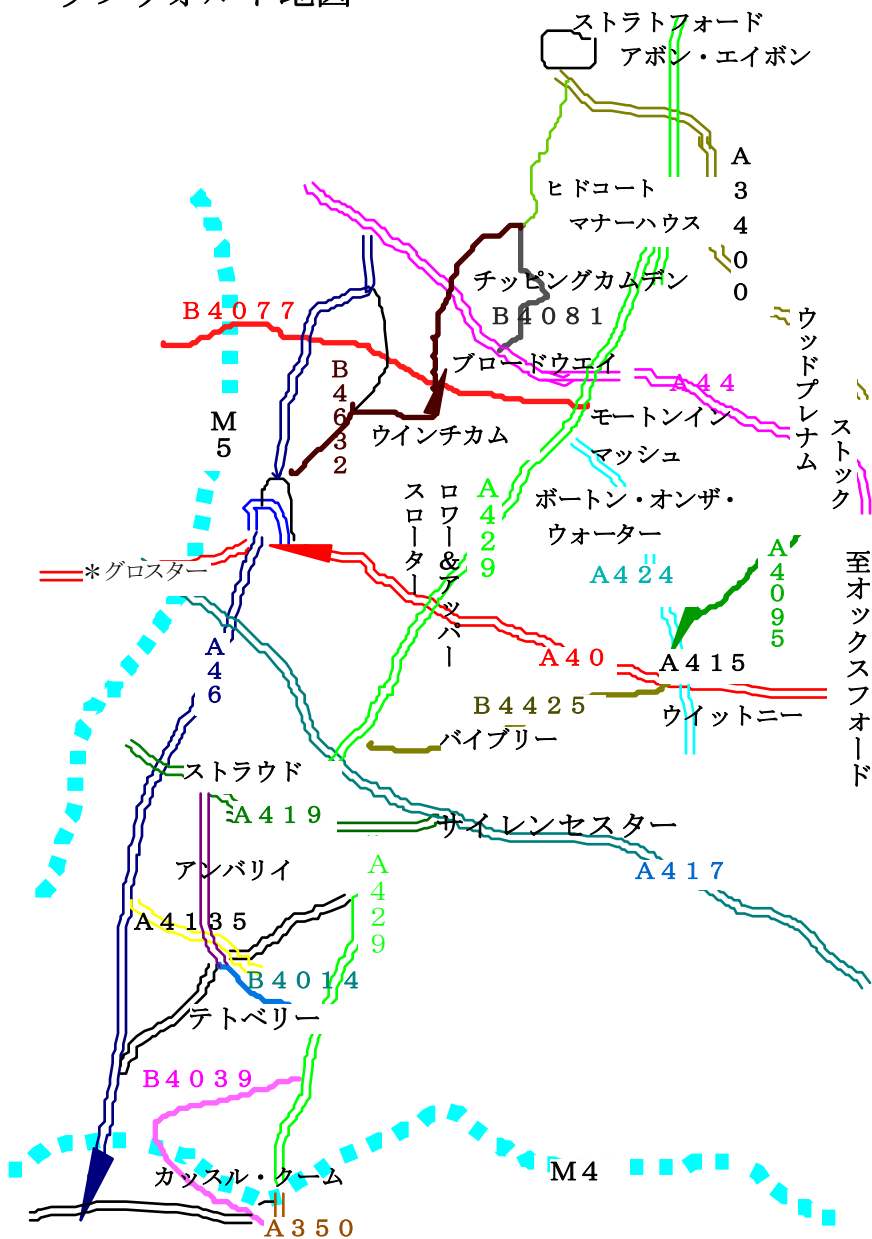
私たちはイギリス最古の学園都市オックスフォードの観光をロンドンと同様の乗り放題バス(£10)で行く事にする。この地の有名な場所は2km四方で一周出来、徒歩でも2時間もあれば周れると言う。

オックスフォード大学から50人ものノーベル賞受賞者を出した名門。見学したいがカレッジ内は午後2時以降でなければ入れない。レンタカーを借りるのに時間がかかる。ホテルへ6時までに入らないといけない。どれくらい掛かるか心配だから町を見下ろせる聖メアリー教会(the Church of St. Mary the Virgin)とカーファクス塔(Carfax Tower)に行くと決めていた。

バスでの説明で「クライスト・チャーチ」「マートン・カレッジ」などの名前の案内がある。さすがに学生の町、制服姿の男子が沢山道を歩いている。

バス停が幾つか過ぎ、このバス停が最後で、次は駅だとアナウンスが入り、下車。建物の上の丸天井が印象的な「ラドクリフ・カメラ」が見える。少し歩くと十字路口に町のランドマークが目に入った。四つ辻を意味するカー

コッツウォルド地図



ファクス塔だ。時計の下でローマの軍人姿の細微な人形が鐘を鳴らすらしいが小さくて余り目立たない。お金を払い塔の頂上の展望台に上がるとオクスフォードの街が見える。



レンタカーを借りてからブレナム宮殿を見るつもりなので、急ぎすぎて聖メアリー教会を見るのを忘れてしまった。もつと計画を蜜にしておけば良かったのと思う。

お昼にしようと思った店で、イギリスで良く見る中に具材を包んだパンとハートマークを書いた可愛いコーヒでランチにした。その後、徒歩で7分ほどのレンタカー店に戻った。

イギリスはレンタカーと言わない。[hire a car]という。

契約書を渡し、国際免許とパスポートを見せ、保険に入った方が良くと書いてあったので「保険」

という英語の単語を辞書で見せると店員は笑っている。玄関に車が着く。私たちがパソコンで注文した車は日本

車の「オート」だったのだが、

「ひつくり」、

フランスのプジョー車だ。ウインカー、ライトなど教えてもらい、出発！

皆さん、外車は

左ハンドルと思っていませんか？

イギリスは右ハンドルで標識も日本と同じ。

私が調べた道でなく、店で教えてもらった道を進むが迷う。

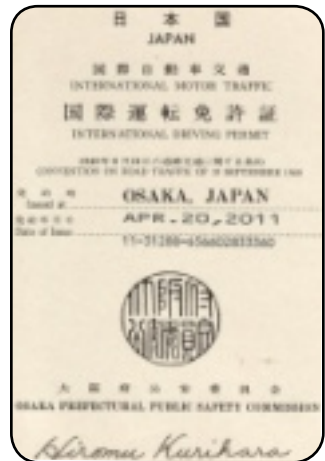
「あちらか」

「こちらか」

と試行錯誤の後、やっとグウグルナビで調べていた国道A44に入れた。北西13K先のウッドプレナムストックの町にあるブレナム宮殿 (Blenheim Palace) へ向け

「GO, GO」

ホテルの方向に向かう帰りの道A4095は、この角を曲がればと調べて分かっていたので、確認しながらルンルン気分だ。地図を見なくても、道なりに進めばいい



い。心配も吹っ飛んでしまっていた。

森の様な広大な土地に、ニレの並木や運河、2つの人口湖があり世界遺産になっている。ここが、チャーチル首相が生まれたブレナム宮殿。駐車場に車を止め、私には買えない外車なので嬉しくてプジョーを撮影。

入場料は£7・5(シニア) 宮殿の建物を抜け出るとイギリス式庭園。噴水が有り、植え込みは美しく刈られ、まるで刺繍のよう。フラ

ンスのヴェルサイユ宮殿によく似ている。ヨーロッパには良く見る形の庭と噴水。ここもヨーロッパだったね。空は青く、白い雲がとても綺麗。

帰りは川に架かる橋を左に見て元のA44に戻り、ローワー・パークあたりでA4095(プラド・ロード)に入る。ウィツ



トニー村からA415に進みA40の高架の下を抜ける
とすぐ、民家のある村から少し離れたゴルフ場を持つ
「Oxford Whitney Four Pillars Hotel」という名のホ
テルに予約している。午後4時に到着。外はまた明るい。
もう少し先にホテルを取りたかったが、夜になれば住
所など見つけれないし、尋ねる人にも出会えないと思
い近にした。もう少し先のチェルトナム (Cheltenham)
の町にしとけば良かったかな。

ホテルは広大な土地に質素な建物だが新しい。ネット
で調べて決めたが意外に良い。ネットではプールと洗濯
場があると書いてあったが無いという。私たちの部屋は
2階なので、スーツケースを運ぶのを願う。部屋は
は広いし、バスタブも付いているので嬉しい。

本にはコッツウォルズの店は早く閉まると書いていた
ので、今日も日本からの食材、カレーだったかな。夕食
を済ませる。

ホテルの外は店も無いので早めの就寝。

7月2日(土)

普通コッツウォルズ (Cotswold) へはバス (Bath)
から入るか、ストラトフォード・アボン・エイヴオン

(Stratford-upon-Avon)なのだが、バースにレンタカー店がなくオックスフォードからにした。又ホテルの選び方も間違えたためコッツウォルズを上へ下へと【地図上】走る事になる。

まずは横に走るA40でバーフォード (Burford) を通る。ここはスピード違反にかかるかと本に書いていた。

ノースリッチを抜け、チェルトナム (Cheltenham) のB4632で進む。グルナビで調べると一方通行があったりして、難しい地図だったが、意外に間違えずに進める。

又、日本ではロータリーと言うが、イギリスでは

「roundabout」と言う。小さなラウンドの交差点なら良いが、大きなラウンドには植木も植えていて向こうが見えず、どれが直進の道なのか？ 英語で書かれた町の名前をすばやく読まなければならない。行く場所の方向が解らないので何回もラウンドを廻った事もあった。しかし日本と違い、道の脇に溝がなく、木が生えていても圧迫感がない。

ウィンチカム (Winchcombe) の町に向けて、田園風景の中をゆったりと風を切り走る。町に入り駐車場のPを

探してメインロードから路地へ。Pのマークを見つけて入ると、おじさんがいて、£1を入れないと教えてくれる。街を歩きメインロードに出る。日本人の経営するカフェを探していると外のガラスを拭いている男性は日本人だ。この人が経営者なのか、それだけで私が探す店だと直感した。この店が「ジュリス」(Juri's) だ。

「少し待てと言う」

娘さんがイギリスに修行に来て苦勞の末認められ、2008年にベストテイルームに選ばれた有名店。本格的なアフタヌーンティが味わえる。

雑誌や観光案内に載っていて日本のツアーもここでアフタヌーンティをすると書いてある。

お店の中は意外に狭いし飾りも質素。テーブルのある部屋は段々になっていて葡萄が植えられテラス式だが屋根がある。外に出ると白いテーブル





とラベンダーの花がセンス良く置かれて、ガーデンの沢山の花の隅にトイレがある。

この店は有名なので訪れたいと思っていた。無理かなと半分諦めていたが来ることが出来て本当にうれしい。

私たちは、お勧めのティを2種類入れてもらい、分け合って味わった。ティポットは大きいので2杯は飲める。

英国のティはミルクを沢山入れるが、風味を味わいたければ入れない方がよいという。何も入れないでいただいた。

ティの種類はいろいろで、ダーズリンはストレートで飲むのがよいという。アッサムティは味が濃いためミルクティ。アールグレイは中国茶葉にベルガモットで香り付けをするらしい。セイロンティはレモンティに適している。イングリッシュブレックファーストティは朝食用でミルクティで、と言います。

「今日、アフタヌーンティの注文があるから2人分ならお出しできますよ」

と言ってもらったが、14時過ぎまで待たないと駄目、今日は曜日によって見られない日が多い二つのガーデンが両方見られるので訪れたい。その後向かうストラトフォード・アポン・エイヴォンのホテルまでの距離を考えると

少し厳しい。だからアフタヌーンティを断念する。オーナーに

「旅はゆつたりとするもの」と言われた。

コッツウォルドでの最後に泊まるモートン・イン・マッシュの町から、ここへは近いが、店は私たちが泊まる火曜と水曜がお休みだった。今思つとスードリー城に行つた後戻ればよかつたと悔やまれる。

そのスードリー城 (Sudeley Castle) は、ヘンリー8世の最後の王妃が暮らしていた。あのロンドン塔で先妻の子供を殺害しようとしたとして処刑された二番目の王妃アン・ブーリンの子供、すなわち後のエリザベス1世が継母である6人目の王妃と暮したのがこの城と聞いている。

アフタヌーンティを諦めてまで、この城に来たかったのに、道が解らず諦めB4632に進む。

ブロードウェイ (Broadway) のタウンへ来たが駐車場がなく車を走らせるとバスのパーキングがあり、運転手に、いつもの

「I want to go to Broadway tower」 (ブロードウェイ

タワーに行きたい) すると

「Do you walk?」 (歩いてるか?) と言われ 「yes」 と言うつ

「It is far」 (それは遠い)

と言われ、車で走る。道は広陵とした丘にのぼって行く。二手にわかれる道を左に取るとフルーツの店があり、ここで良いのかと尋ねた。反対だと言われる。その店でイチゴと小さい紅い透きとおったものを買う。車をターンする時植え込みの石が車の底にあたった。

「ジャリジャリ」

と摩る音、底は少し白いが目立ちにくい。

「レンタカー店に内緒にしようー!」

A44を進むとタワーが見えて

くる。右に曲がる道は草が生え細くて、大きなツアーのバスは入れないだろう。その細い道に入り皆が道の端に車を駐車している。その後ろに私たちも止めた。タワーに上れば360度の見晴らしで、丸いガラス窓からは羊が



草を食み、田舎の閑やかな自然が素晴らしい景色。

先ほど購入したイチゴと透明な物を食べるが透明なものは酸っぱくて種があり食べられない。イチゴは美味しく、人があまりいないので、ゆったりとした気分を楽しんだ。

タワ一の小道を戻りA44を横切りB4081の道を走ったと思ったが、日本に帰って調べるとコッツウオルド・ウエイであったのかと思われる。しかしチッピング・カムデン (Chipping Camden) まであまり時間がからず進む。

日本では考えられないストリート・パーキングの仕方。車の前の方を家にむけ縦に止めている。我々も運よく近くに止めることが出来る。町の象徴、石造りのマーケット・ホールが道の中央に置かれたように建っている。昔は羊毛の取引のマーケット。産業革命で繊維産業が毛織物から綿製品へと変化したから古くから羊毛交易で栄えたのがコッツウオルド。

近くに色々な鉄製の動物を売っている店がある。可愛いので小鳥の置物を購入。他にもカタツムリもあり欲しいが、重たいので諦める。日本の茅葺の家のような建物



のポストカードがあり、購入し車に戻る。

私が行きたかったヒドコートマナー・ハウス・ガーデン (Hidcote Manor Garden) は、私が購入した旅行本には載っていないが、チップング・カムデンから20分位北に位置する英国でも美しきで5本の指に入る庭園で有名。道はB4061からB4632への道と合う所を右に折れる。細い道だが、前からのバスとすれ違いが出来てよかった。

ヒドコートマナー・ハウス入口にはガーデニング用品や可愛い花が売られている。

ここがガーデニング愛好家には憧れのガーデン。持ち主がナショナル・トラストにまかせた庭は造形美と自然とが融合している。生垣で区切り、庭が見えないように29の趣の違うガーデンがある。植木で鳥の形のトピアリー、暖色系植物だけのシックなグラディシヨンの庭、イエローとブルー



で出来ている庭や芝生と生垣が200mも続く道なのか庭なのか？、どの色とどの色を合わせれば綺麗に見えるのか、この花と、どの花をあわせれば良いとか、更に川べりには、この花が似合う等々考えぬいた自然そのままのように見せ、しかし細部にまで配慮されたガーデン。センスが光る素晴らしい癒しの庭に沢山の人が訪れている。

すぐ近くのキフツコート (Kiftsgate Court Gardens) へは右に折れてすぐに左に駐車場。ここも苗や鉢などの庭の用品が売られている。

入口から入り建物に行く庭はピンクのバラ。

このガーデンは白い一重の小輪の花が、ほのかに香る



キフツコート・ローズが7月初旬から3週間が見ごろらしい。巻きつくように生えているという。なかなか咲いているのに出くわせないうという。私たちも気づかなかった。急な坂の庭を進むと下の谷に向けて花が植えられているので下から見るのが綺麗だ。下には自然の花の中にブルなのかニケ月形になっている。傍にベンチが置かれている。そこに腰をかけ、遥か彼方の田園風景を眺め郷愁にひたる。

どうして、こんなにも土地が広く感じるのだろうか。日本と違い田畑の区画が大きいからなのか。山がないからか？。そしてのんびりとした雰囲気にはひたる。

どちらのガーデンも、植えたのではなく昔から生えているという様子で、これがとても自然な感じだ。

谷の庭の坂道で女の人がおでこから血を出し座っている。ガーデンの職員が来て手当をしている。花に見とれ



急な坂でころんだのか。

この二つのガーデンを鑑賞出来たのが嬉しい。そこを出て車を真直ぐに進める。

「あ、右にまがらなければ駄目だった」

と思ったが狭い道でターン出来ない。しばらく走ると牧場に入る広い場所が。折り返そうとしていると、後方に車が止まるので邪魔をしたのだと思ったらロンドンに住む日本人のご夫婦。その方達も間違ったと言う。

私たちはストラットフォード・アポン・エイヴオン

(Stratford-upon-avon)に行くと言うと、しばらく同じ

道だから、ついて来なさいと言ってくれた。前の車につ

いて進んだので道は覚えていない。分かれ道でここから

右方向に進めば良いと教えられ車を走らせた。沿道にた

くさんの住宅が並ぶのでここがストラットフォードの町か

と思い、スーパーで豚肉、トマト、キュウリ、サラダ菜

を買い求め、さらに走るがホテルが見つからない。本に

はチップング・カムデンから30分と書いてあったのに。

車をメイン道から住宅街に入れて、人に尋ねると男性が

右を向き

「真直ぐ、」

と言う。奥さんが私たちの車を指さした。すると反対側

に顔を向け、何と言ったか指の方向で了解出来た。メイ
ンロードに出て進む。ホテルが見えたが駐車場の入り方
が判らず、ここは一方通行で300mぐらい進み、もう
一度廻りやつと着く。私達の泊まるホリディ・イン・ホ
テルの横が運河になっていて、ナローボートで遊覧が出
来そう。今までのホテルより大きく新しく綺麗で良い。
夜にシアターでシエクスピア劇を見ることが出来るの
だが、遅かったため行けなかった。

夕食は日本から持ってきた調味の素と、スーパーで買っ
たモヤシや豚を使いフライパンで炒めるだけの料理を作
り食べる。風呂に入り、くつろいでいると花火の音がし
たので外国の花火を楽しむ。

7月3日 (日)

朝、食事の前にエイボン川
に行くと日本人のツアーの団
体がいる。関東からのようで、
話しかけたが返事が返ってこ
ない。公園の名前はバンクロ
フト・ガーデンでシエクスピ
アの像と名作劇の登場人物が



立っていて、彼の故郷を印象つけている。

運河にはナローボートが沢山停泊。そこにいた男性に、
『Would you show me the room?』 (部屋を見せて)
と言った

『Wife sleepy』 (妻が寝る)
と笑いながら断られた。細長いボートでの生活をしながら
旅をするのも良いなと思う。

観光客が川沿いを歩いて行く方向に私たちもついて行
く。教会がありみんなが眺めている。

『有名な人の墓かな』

と話しながら小道を歩くと、昨日私たちがホテルを尋ね
た場所だ。車では狭い道。別のルートを教えてくれたの
だと気づいた。ここでも英語が出来ないのを歯がゆく思
う。そして皆が見ていた教会が、シエクスピアが眠る教
会 ホーリー・トリニティ (Holy Trinity Church) だっ
た。

ホテルに帰り朝食をとり、チェックアウトを済ませる。
ストラトフォードの街を観光する事にするが、車を置いて
いこうと

『Can we park here?』 (車をここに停めようか?)

と言うと駐車代金を請求される。市内は徒歩圏内だしPを探すのも煩わしい。仕方無いか。

シェクスピアの生家 (Shakespeare's Birthplace) がなかなか見つからずウロウロした。駅に行けば市内観光のバスがあるだろうと思いついてみる。田舎なので駅員もおらず、タクシーの人に聞くと、観光にはタクシーを使えと言う。自分達で探す事にして戻る。地図をみて、ヘンリー通り、この場所だと思いつくと、そうだと言う。3か所共通のチケットを買い、入ると

「Movie」という。

私たち、ムービーノールと言うのに、進めと言う。映画館の様な建物を通り抜けると庭に出た。チューダー様式の館。ここが文豪シェクスピアの生家。室内は父親の店、両親の部屋、ベッドや色々な生活用品が置かれている。裕福な家庭であつたと聞いた。ここで執筆したのではない、のちに故郷に思いがあつて帰つてきたのだと聞いた事がある。

庭に置いてあるベンチに腰掛け、ハムレットのフレーズを思い出す。生きるべきか死すべきか、それが問題だの

「To be or not to be」
この後何だったかな。・・・

「To be or not to be that is a question」
だそうです。

出口は土産物売り場になっていて、私たちが品選びをしていると5、6人の日本人が呟く。

「生家の入り口は何処だろう」

私たちと同じように、やはり皆解らないのだ。この町の観光スポットは徒歩圏内にあるので自分たちで廻るようだ。生家の入り口を教えてあげ、私たちは、お土産を購入する。

建物を出てチューダー様式の家並みの町を歩き、二箇所目のシェクスピアの長女の夫の家、ホールズ・クロフト (Hall's Cleft) に入る。彼はお医者さんで、部屋には医学の物や家具が置かれている。本も見ないで、さあ次はと考えずにいた。



ホテルに戻り車をとり、シエクスピアの母の実家を探ねる。少し遠いがメアリー・アーデン(Mary Arden's Farm)の看板が道の所々にあり迷わない。

農家の納屋に動物が飼われて当時の農具や農園の様子がかがわれる。私の家でも使われていた農具も置かれていて懐かしい。

遠くの母の実家は見たが、肝心のシエクスピアの年上の妻アン・ハサウェイ(Anne Hathaway's Cottage)の実家で、二人のロマンスの場所を見るのを忘れてしまう庭も美しいという。今日の予定をたてない私たちです。

『残念』

お昼も過ぎていたので次に急ぐ。コッツウォルズの西真ん中ぐらいの位置ストラウド(Stroud)の町までA46で進むのだが、真つすぐに来たのにチェルトナム近くになりA46が無くなる。

「Where am I?」(ここは何処?)

という感じ。この町はどこ?。教会に車を止め、ついで見学。内部は大きく綺麗で由緒ありそう。教会のカフェでお茶とケーキを食べ、道を尋ねた。さらに車を走らせたが判らない。すこし行ったところでまた尋ねると

「高速M5に行った方が簡単」と言う。

高速道路に入る。料金はいらぬし、道は広くてスイスイ進むがグロスター(Gloucester)の標識が無い。まだまだと言うので走り、サービスエリアが見つかり訊く事にした。

何と反対方向の4目目に車を返却するバーミンガム(Birmingham)の近くまできていた。焦るし尋ねる言葉がみつからない。いつもの言葉で良いのか。教えられたとおりに進むと反対側にでた。高速を引き返しグロスターの表示を見つけ高速を降りた。

『ひと安心』

私たちの宿泊はストラウド(Stroud)の

「Anbaries inn」

の名前で小さな民宿の様な所なので、尋ねても知らない人ばかり。

「ノー アイデアー」

と言われたり、色々な方のお世話でやつとの思いで丘の上のB&Bが見つかる。アクセスがない不便な村で、車が無ければ来ることができない。

自然の中でウォーキングを楽しめるヒルがある。

オーナーのおばちゃんがテキパキとした口調で話し、

とても感じが良い。

私たちの部屋は3階なので、若いお兄さんが重たい荷物を運んでくれる。

日本の旅館では当たり前のように運んでもらうのが、

「御苦労さん」

と、ここでチップ。海外はこれにお金がかかる。

部屋は広いし、お風呂は猫足のバス

タブで、シャワーの置く所が電話の受話器のようで、とても可愛い。



夕暮れの景色を眺めようと庭に出ると、ワインを片手に宿泊者がいる。私も白ワインを注文。ワインを味わいながら丘の向こうに夕日が沈むのを見てみると、自分たちだけで、ここまで来られたことに嬉しい思いが、いっぱい感慨深い。ワインの味もひとしお。日本と同じ夕日なのにロマンチックに気分が弾む。

夕食は日本から持ってきた物で済ませたが、ここには地元の人が食事だけに來ることも多いみたい。私たちも

ホテルのディナーにすれば良かったかな。貧乏旅なので余り外食ができない。その上英語が出来ないので横文字のメニューを読むのが面倒。メニューを見せられても何か解らない。私の発音での注文が理解してもらえないか、と不安もあり行かない。ある友人が、スクランブルエッグの英語がどうしても通じなくて、そのあと英語で話したくなくなつたと言っていた。写真入りのメニューがあれば注文が簡単なのだが。英語の勉強にならないが。

日本では夜更かしをするが、イギリスに来てから規則正しい早寝、早起きの生活だ。

7月4日(月)

朝、窓に見えた光景は沢山の牛が丘を下ってくる姿。この辺の住人は、いつもの事なのか、牛をうまくよけて車を走らせている。

私たちは朝の風を感じたいと、ヒルに散歩に出かける。そこは牛の糞がいっぱい、昼間は牧場にいるはずの牛の姿が無く、何処に行ってしまったのか。ホテルから見た牛は、ここから下ってきたのか。丘から遠くに村が見

え、それがテトベリー方面だったと後でわかる。ホテルに帰る道でスクールバスなのか路線バスかが、わからないが、中学生位の4人の子供を乗せて行つた。

朝食は私たちだけだった。いつものようにスクランブルエッグとトマト、ソーセージ。パンと同じ皿に太めの黒いソーセージのような、血が固まったような物が載っている。名前を教えてもらうが、すぐに忘れた。



チェックアウトの時 サイレンセスターへ行く道を訊ねる。

「Could you tell me how to get to the Cirencester and Castle Combe?」 (サイレンセスターそしてカッスル・クームへの行き方を教えてください?)
相手の英語が解らないでいると

「Wait.」 (待つて)

とひと言。おばちゃんがテニスに行くので、途中まで案内してくれると言う。

私たちが散歩をした丘を走りぬけ、坂を降りて少し行っ

た所で

「Thank you for your kindness」 (親切にありがとうございます。)

と言ってお別れし、道なりに真つすぐに進む。イギリスは山が多いと言う。あの丘は山とも言えると思ふけれど……サイレンセスター(Cirencester)をいつ過ぎたのか、南に位置する王室の避暑地テトベリー(Tetbury)の小さな町の標識を見た。この村に王室の農場があり、チーズの土産店もあると言うが、急ぎ旅なのでやり過ぎず。

私の調べた道は、右に入ると、テトベリーになつていたが。少し進むと調べた道サイレンセスター (Cirencester)からのA429に入れた。サイレンセスターの町を通らない道を来たのだと思う。M4の高速の下からのA350になる。ハリー・ポッターの映画の撮影に使われた村のチップナム(Chippenham)近くで右(A420)に入り少し行きB4059へ。目に入った看板に町の名前が左と書かれているから左に進むと右に駐車場。皆が歩いて行く。私たちも車を置き少し歩くとカッスル・クーム(Castle・Combe)の村。道の真ん中に石が立っている。これは日本でも見かける村まで何里の標識なのか。ロータリーの役割かとも考える。本にはマーケット・クロス

(Market Hall)という名前が書いて

ある。屋根が付いている方がマー

ケット・クロスだろう。こんなに

小さい中で商売していたのか

な。道の真ん中の石を見て左

に曲がれば一本道で、両側

には蜂蜜色の古い家並みが建つ。

狭い道を歩いていると家から人

が出てきて可愛い花を植えたカゴ

を家の壁にかけている。家の前に庭が

無いので、どの家々にも壁や2階のバルコニーに花が飾

られて綺麗。保存状態が最も良い村で14世紀ごろから

受け継がれた街を住人皆で守っているのだと言つ。

家の壁の石は古いが、つやのある石で古びた感じがな

く、落ち着いた街道という感じで好感が持てる。村で最

後の家並みの所の川にかかる橋まで歩いて5分もかか

らない位で、このカッスル・クームの全体の散策が終わ

る。

この村に有名なマナーハウス・ホテル (The Manor

House Hotel)があり英国屈指の美しさと格式の高さを誇

るといふ。



マーケット・クロスにもどると外国人たちが、道に置いてある椅子に座りお茶をしているので、私たちも見習ってティを味わう。ゆつたりとしたイギリス人になった気分。カップを持った写真を記念に写す。

昨日の道の間違いもあり、ハリー・ポッターの映画の撮影があったレイコック (Laock Abbey) は諦め、元の道B4059からA429のサイレンセスターへ向かう。

昨日高速を長距離走りガソリンをたくさん使ったし、コッツイールドは田舎なのでガソリン・スタンドが少なくと本に書いてあり、petrol station (ガソリン・スタンドとは、言わない) で入れることにする。

私たちはこの車のガソリンの種類を訊くのを忘れていた。隣で入れているひとに

「Could you tell me this car gasoline?」 (この車のガソリンを教えてください。)

尋ねると、私たちのガソリンの匂いを嗅いで、これと言って教えてくれ、助かった。しかし英国はガソリンと言わないが。

日本でもセルフが普通になってきたのでやり方は解る

のでガソリンを入れた。スーパーの様な所の店内のレジで、何番のカウンターで入れたと数字を言えば金額が提示され支払えば完了。

サイレンセスターのA417の道から少し入ったA435に入った所に親子で造るサニーハウス・ガーデンがあると本に書いていた。車を走らすがA435が見当たらず2回も行き直したが諦めた。

サイレンセスターより地図上に上がるA4429に入り少し走る。さらにB4425を進むと、意外に早く突き当たりに「鵜の絡まった建物」

「スワン・ホテル」 (The Swan Hotel) が目に入ってきた。ここがバイブリー (Bibury) 村を代表する人気のホテル。ネット予約した部屋はスイートしか空いていない、宿泊の値段はユーロ (Euro) で書いてあり1ユーロを150円で計算すると高くなかった。心配しながら泊まる事にした。

ホテルの隣の駐車場は狭い。部屋数が少ないのかも。私たちの到着が早かったので、楽に車を止めスーツケースを持つてのチェックイン。玄関は小さく、カウンターも小さい。しかし、ロビーは可愛くて、クマの縫いぐる

みが椅子の上でお客様を出迎えていて、とても可愛い。

私たちの部屋は2階で、部屋のカギをあけると、緩やかな曲線の階段。それを上がり3階に行くと、左はバスルーム、突き当りと右に2部屋あり、ベッドの上で縫いぐるみのクマが迎えてくれる。

ここに宿泊した友人は古いホテルだったと言っていた

が、内装は綺麗な白い壁で置物自体がロマンチックだ。3階なのに部屋から裏の庭に出られる。ここに宿泊を決めて正解だったのでデモンションがある。



早く着いたのでバイブリーを観光する。コッツウォルドのツアーでは必ず訪れるメイソンの場所なので観光客が多く、日本人も沢山。アーリントン・ロウ (Arlington Row) の町の写真を撮りたいが、人が写るので、明朝もう一度来ようと決める。

トラウト・ファーム (Trout Farm) はマスの養殖場。入つてみると水は透きとおおり、小川は鏡のように空を写し、花も綺麗に咲いて美しい景色。奥はホテルの庭園になり、日本のガーデンでもよく見かける鉄のテーブルと椅子が置いてあり癒される。

土産売り場があり、可愛い羊のマグネットを沢山買う。外国人がマスを買っているのを見て私たちも小さいのを買いホテルで焼いてもらうことにした。部屋に帰り食事の用意をして待つていたが、マスが届かない。カウンターに行つて尋ねると、私たちの注文したことが通じてなくマスは冷蔵庫に入ってたまま。

「Grill please」 (網焼きにして)

今度は部屋に届いたが、チップを渡すのを忘れてしまった。日本人はチップをくれないと言われていたのかもしれない。恥ずかしい。魚は塩焼きで、おいしいと言うより懐かしい。

夜は、ゆつたりと一人で二部屋を楽しく過ごせた。

7月5日 (火)

昨日は人が多かったのの後回しにしたアーリントンロウへ再び向かう。ホテルの前の川べりを歩くと橋が架か



り、そこに紅い花が咲き青い空と白い雲を川に写してとても綺麗。この地で採れる鉱物ライムストーンで造られた家々が並ぶ「英国で一番美しい村」と言うアーリントン・ロウ。写真を撮りながらウイリアム・モリスの言った

「この世の天国」

の言葉を実感しようと散歩する。

17世紀の家が軒を連ねた何もない小さな村をのんびりと散歩出来るこの自然が、ロンドンで生活している人達にはたまらないのだろう。でも私は、蔦の絡まった老舗ホテル・スワンがあるからバイブリー村

も好きだが。ここ、アーリントン・ロウ

は住人の姿を見かけず、生活感が無い。

同じような景色だが、昨日の村は人の営みが見え、昔の建物を美しく保存して使っていると思えるカッスル・クームの方が私は好きかも。

朝の散歩から帰り朝食に向かう。余り大きくないホールで込み合っていない。その中に日本人の3組を見かける。



朝食は以前のホテルと違い綺麗に洗練された料理だ。卵の半生を丸い形にして品良く皿に盛り、スモークされたマスと組み合わせている。上品かつ優雅な気分になる。これが

『ブリテイッシュ・モダン料理』

だという。昨晚、ここでディナーにすれば良かったかな。ケチケチばかりしている我々の旅！

嗚呼

食事が終わり、私たちの席近くの、ご夫婦と話す。奈良の方で、バスで車を借りたという。私が最初考えていたコース。日本車を借りるつもりが外車だったと言う。私が

「私たち外車など買えないから運転できて良かったわ。」
と言うと

「そうですね」と
返ってきたけれど、あの人たちは日本でも外車に乗っていないそう。

部屋を見せてもらうと、私たちの向かい側だ。部屋からはこの町に入ってきた道が見え、昨日観光したホテルの庭にラベンダーが咲く美しい景色が見渡せる。

私たちは荷物を玄関へ下ろしてもらい、今度はチップを忘れないでチェックアウトした。部屋がスイートなので料金が気になる。しかし、2人で27000円位(カード払い)。しかも魚を焼いてもらったのも込みの金額である。日本では普通の値段。夏のヨーロッパはお客が多いというのに。田舎だからか。海外の宿泊は安いのかな。次の場所へは来た道を少し戻りA420へ。ボートン・オン・ザ・ウォーター (Bourton on the Water) へは、丘を越えて行く。

日本とイギリスは、それほど変わらない面積だが、人口密度のせいなのか、山がない地形のせいなのか、道幅は普通なのに、ゆったりと走れる。水色の花畑を見つけたので、農家に入り駐車させてもらおうと声をかけたが人がいない。勝手に家の向こう側の畑に行き写真を撮した。

アメリカなら見つかれば射撃されるところなのだが、のどかなイギリスだから出来るのだと思う。

ここはラベンダー、向こうの畑は、けしの花。こんな景色に憧れて



[Beautiful view] (美しい景色)
と叫ぶ。

そこから少し車を走らせるとボートン・オンザ・ウオーターは右と看板。右に進むと家並みが見えた。道路脇に白くひいた線の中の駐車場

に車を止め料金を払い、その伝票をウインドウに置いておく。道の突き当たりを右に折れると川に沿った家並みが見える。

木々が植えられた水辺の風景が美しい人気の村が、ここ、コッツウォルズのベニスとも言われている。水の流れば

浅く、人々が川辺に座り、犬が川で戯れている。川沿いには個性的なショップが立ち並び、旅行者を魅了する。テレビでみた光景そのままだ。川べりに沿って歩くとほんの少しの時間でこの町も観光できる。

モデル・ヴィレッジ (The Model Village) があり、家はライムストーンで作られ、この街全体が9分の1サイズで再現されて、とても綿密に街を表現している。ここ



に居ると小人の国のガリバーになった気分で、とても面白い。

川辺に戻り、アイスでも食べようと椅子に座って休憩していると、雲行きがややしくなった。急いで車に戻るやすぐ雨になった。次の場所 ストウ・オン・ザ・ウオールド (Stow on the Wold) へと走る。

元のA429まで戻ったが曲がる道が見つからず、もうロワー&アッパー・スローター (Lower & Upper Slaughter) の看板がでてきた。

ここを見ようと左に曲がり進むと道が細くなり、本当に、ここで良いのかと心配になるほど細い田舎道が続き怖くなり住宅のある方に戻り、道にいる人に尋ねると家の中の人に訊きにいつてくれる。長屋づくりの家で玄関に杖をついたおばあさんがいた。庭は小さいが綺麗にガーデニングされ、花が咲きほこっている。

イギリスの庭は何処でも綺麗な花が植えられている。

おばあさんは (go down this straight) (この道を降りていく) と言ったと思う。先ほどの所を道なりに進むと雨も激しく降り、観光を諦め、今日のホテルを目出

す。

元のA429の道に出て進むと大きな街並みに出た。大きなスーパーに駐車して訊ねると、もうすでに私達のホテルを過ぎていた。

ここモートン・イン・マーシュ(Moreton in Marsh)はコッツウォルドで一番大きく賑やかな街ではないかと思う。又、オックスフォードへの道A44も通っているから、ここを拠点に回れば良いと思う。

このA429道は広く、道に沿った古い家並みの一角に私達のホテル、「マナーハウス」(Manor House)があり古い建物。あのカッスル・クームにある英国屈指の高級ホテルと違います。メインストリートに車を駐車しチェック・インする。ホテルのロビーは古いエレベーターがギンギン音を立てる。増築した奥の建物は新しいようだ。

雨も上がり早く到着したのでモートン・イン・マーシュの街を右側の店から見えて歩く。土産物店、アンティーク店、露天商を覗きながら、先ほどのスーパーへ来た。今度は左側の道を帰りながら、カフェで遅いランチかおやつの時間。前にも食べたミンチと野菜が入ったパンを

食べた。通りを散歩しながらホテルに帰り、入浴、洗濯をしてから、スーパーで買ったもので、ディナーを作る。いつものトマトとキュウリのサラダも食す。

やっぱり明日はロワー・アップ・スローターに行くこと(言うこと)になる。

7月6日(水)

A429を、ほんの少し戻り右に曲がり昨日のおばあちゃんの家の前を走る。林、畑を抜けると高級ホテル、ローズ・オブ・ザ・マナー(Lords of the Manor)が左にある。その前に小さなロータリーがある。一本の木が植えられ、皆が車を置いているので私たちも駐車。すぐそばの小さい教会に行くと素朴な礼拝堂で、田舎の集會場のような感じがする。お賽銭の様にお金を置いて出よう(とすると、管理人が微笑み、お礼を言ってくれた。

ホテルの前で老人に会い

「I'd like to go to Lower & Uppeth・Staughter」
(ロワー・アップ・スローターに行きたい)

の英語を言う(とホテルの横の道を手で示す。言われたように進み木戸を開けて入ると、中には沢山の羊の群れが

びっくりしたかの様に、私たちを見つめてくる。顔と耳が黒くて、とても可愛く、私たちが歩いてすすむと両側に分かれて通してくれた。羊さん達の寛ぎの邪魔をしてしまつて御免なさい。

草原や林を抜けアイ川に沿う道を、せせらぎの音を聞きながら進むと、蜂蜜色の家が並び、風情があるロワー・スローター (Lower Sletterau) のシンボル、古い粉ひきの水車小屋。建物の中は蜂蜜や羊毛で出来たものが売られている。私は大きなティカップとポットがセットになったものを購入。

白い馬でアイ川の中をカッコよく散歩している人がある。川沿いにホテルや蜂蜜色の家が立ち並び、昔の田舎を思い出させる風景で綺麗な川の流れが、私たちを癒す。私たちも、田園を歩いて楽しむ方法、これがイギリスのフットバスを味わうというものかと感心。ここに来て本当に良かった。

同じ道を帰り「ローズ・オブ・ザ・マナー」でティを



飲む事にする。ロビーは高級感が漂う中に一人のボーイがいて

「Can we have a tea?」

(紅茶を飲むことができますか?)

と言えばメニューが出てくる。隣の部屋でガーデンを眺めながら、セレブ気分でお茶を味わう。お茶なら高いと言っても私たちでも払える額だろうと、何のためらいも無くお茶を頼めたことが不思議に思える位、大胆だった。

アラブの人は裕福なのだろう、アラブ人の家族が宿泊している。ホテルのトイレを借りると、トイレの床は大理石で、廊下、壁まで高級感がある。庭に出てみる。青空に白い雲がぽかりと浮かび建物を綺麗に際立たせている。ここで泊まったかのように振る舞い、ホテルの写真を写し喜びあふ。

まだ観光出来る時間がある。ここに来るときにも尋ね



たチッピング・カムデンの茅葺き屋根の家を見るのを忘れていたから車を走らせた。

モートン・インマーシュの道A44を左にとり以前止めた道には駐車されていたので、マーケット・ホール近くで停車。地図の確認もせずに山のほうに行くと、茅葺きの民家が沢山あり、この辺は昔からこのような建て方であつたのか。庭は綺麗にしてある。無断で庭に入り写真を撮りまくる。しかしポストカードの写真で見た家が見当たらない。私たちと同年配らしい日本人男性に会う。ハガキを見せると

「あちらの方で見かけた気がする」と教えられた。そこは閑静な

近代的な高級住宅街。道路に沿って、どつしりと大きな屋根根の家だ。何に使用しているのか、大家族で住んでいるのか?。飛驒の白川郷を思い出す。

スナップ写真を撮り、車の方に戻ろうと本街道に出ると「レッドライオン」(The Red Lion Inn)の看板。本に載っているレ



ストランで地元の食材を使った英国料理が自慢らしい。

建物の中のパブのカウンターでふかしポテトの上に何かとチーズが載せてあり、(ジャキーマポテトなのか?)まわりに野菜がどっさりを注文。中庭の傘のベンチに料理が運ばれてくる。それは前に食べたのと少し違う味で美味しくいただく。

今度はブロードウェイの街へ。4日前に通ったが解らないので尋ねる。右手に曲がればハイストリート。道に駐車場がなくPを探すと、ビル裏にあつた。料金を払い店の中を抜けるとハイストリートに出た。広い道の脇には個性的なショップが多く土産物や洋服、骨董品やクリスマス用品の店、食事の出来る所やホテルなどが沢山。クリスマス用品を売る店は街のはずれ近くにあり、行ってみたが5月〜9月は月々水しか開かないらしい。やはりクリスマス近くにしないとねえ。

「残念」

私たちは反対側の道の店も見えて回る。ある店で、6匹のラビットが後ろ向きに連なつた鉄製のフックを見つけた。とても可愛い!ここは、湖水地方ではないけれどイギリス土産に良いと思ひ、3個買う事にし

「Could you give me discount?」(値引きして?)

と、おじさんに言うつと、あつさり1個1000円近くにしてくれて嬉しい。この町は骨董品が売られていると言うのを訊いていたが買う気が無いので見るだけ。

モートン・インマーシュと共にブロードウェイも観光の拠点にしても良い街だと思つたが、両街は少し近すぎるのでどちらか1箇所を拠点にすると良いと思う。

今日はホテルのディナーを頼んでいるので、早めに帰りお風呂も済ませ、7時に少しおしゃれをしてディナーに臨む。ワインを注文。すぐ々楽しみにしていたコース・メニューだが、普通。ほろ酔い気分で夜は良く眠れた。

7月7日(木)

朝食に行くと、またも日本のご夫婦がいた。日本人に会つと、またも同じ言葉で、

「日本語が喋れてうれしい」

と声をかける。

ご夫婦はバスでコッツウオールドを廻つていと言ひ「列車の時間があるので」

と早く済ませ帰つた。私たちも2日間の滞在で、今日チェ

クアウトをして長い距離を走らなければならない。

車を返却するバーミンガムまで、どれほど時間かかるのか心配。A433をストラトフォードの方向からM42の高速に乗る。M6のバーミンガムの表示をみて高速を降りて尋ねるが店の名前を言っても解らないらしい。駅の名前を尋ねると、

「いちら」
と、言う。

「How long does it take?」 (どれだけ掛かるの?)
10分と言う。少しずつ進めて行くと、警察が見えたので訊こうとすると2人のポリスが出てきた。地図を見せ、いつもの

「I'd like to go to this!」 (此処へ行きたい)
と言う英語を言ったのに、地図を見ても何も答えてくれない。沢山の単語を言ったが、車に乗って行ってしまった。私の英語が通じなかったのか、協力してくれない。仕方なく少し進む。ここから10分と言うから道に車を駐車し1時間分の駐車料金を払い歩く事にした。ガードがある。駅が近いのかな。ビル街の商店が建った通りになり、人が沢山いるので訊いてみると

「あちら」

又、訊くと

「いちら」
と言われ、街を右往左往。東西南北に歩くが判らない。旅行店なら判るかなと入るとパソコンで調べてくれた。(ここでチップを払うのだったかな?)。地図をもらい進む。ガードの下に店を見つけた。やっと辿りついたがここを見つけるのは至難の業だ。

店に入り

「I am lost!」 「I could not come to here!」 (迷いました。ここに来ることが出来なかった)
と言った。車に英語の本と辞書をおいて来ていたので色々な言葉が出ない。店の人はパソコンを出し地図で、どこかと言うが、

「I do not know!」 (分かりません)
としか言えず、来た道が、あちこちしたので戻る道が解らない。考えながら探さなければいけないので

「help me!」 (助けて) 「Follow me!」 (付いてきて)
を繰り返すと店の人は私たちの後をついてきた。私は「Sorry!」 (すいません) 「It is far!」 (遠いです)と謝りながら

「地図いっしょもらったね」 「いの道歩いたね」

と確認して行き、先程のガードを見つける。この道を右に入れば車が

「あつた」

ひと安心で気が抜けた感じになる。方向音痴でなくて、良かった。

「見たか、まだまだ衰えてないぞ」

店の人に乗せてもらい、レンタカー店に、たどり着いた。バーミンガムの街は都会で沢山の車が走り、一方通行やトンネルなどがあり、回り道しないと店に入れない標識もあるみたい。とても、私たちの運転では来ることができないと感じた。車を置いてきたのが正解だった。

手続きを終え、5お札する事にした。道に迷ったので車体の下の白くなったのを故意に言わなかったのではなく、忘れてしまっていた。

タクシーで駅に行こうと思っていたら、今度は違う人が駅まで送ってくれ、ありがたかったので、また5のお札。コーヒ代位になるかな。

駅に着きキップを買うと、すぐに列車が到着する時間だ。交代でトイレに行く時間が無いので急いで、トイレ使用料30ペンスを払いスーツケースをひいたまま、ト

イレを済ませる。急いでエスカレーターからホームに降りるとすぐ列車が着き発車。マンチェスターのピカデリー駅 (Manchester Piccadilly) からの列車は込んでいたが次の駅ですぐに座れ1時間位乗る予定。ピカデリー駅の到着は14時59分。駅のホームには銅像がある。何を言いたいのだろうか。

私たちのホテルへは、地下鉄で行かなければならない。地下から電車に乗り、走ると地上に出る。まるで路面電車のチンチン電車 (ALTRINCHAM) (£2.40) 幾つかの駅を過ぎ窓の外には田舎の工場地帯が流れ

「田舎だね」と

話していると、スター・ホード駅に到着。ホテルは (Grifford Hall) 駅裏にあり古くて小さい。ここは旅行会社にとってもらったがネットで見つけたのと同じくらい悪い。

カウンターにはポーターを兼ねた人が一人だけいた。

私たちの部屋は広いが飾りけがなく、良くない。いつものようにスパーへ買い出しに行った帰り道に



出会った人達は労働者風の人が多く、マンチエスターは織物と機械と鉄で栄えた街だから工員が多いのだと思う。今はサッカーが盛ん。

7月8日(金)

マンチエスター・ピカデリー駅からチェスター(M Chester)駅への切符を購入。ホームを歩きエスカレーターで上に登り外側のホームに降りる。観光の本では乗り換えなしで行けるのか、載っていない。「direct」(ダイレクト)の単語が出なくて

「Is this train transfer?」(この列車は乗り換えですか?)

と聞いたが通じない。しばらくして、私の英語が解ったのか、ダイレクトだと階段の上から聞かえた。リヴァプール(Liverpool)を通るのだったら1日で2か所行けるかな、と思ったが、三角の一边を通る感じでダメだった。

1時間程でチェスター駅。駅から真つすぐ行くと大きな道のロータリーに突き当る。中心街まで徒歩20分と本に載っていたが、どちらに行くか迷い、背広をきっちり着た老紳士に尋ねると、その通りまで案内してくれた。

この街は白壁に黒い梁の建物が特長のチューダー様式

で時計台が道に門のようにあり、これがイーストゲート。ストリートにはショッブ、レストランが並んでいて、右手奥に聖堂の塔が見える。チェスター大聖堂(Chester Cathedral)に入ろうとするが入れてくれず、ショッブならと言うので入ると赤い服の老女が店員だ。外国では歳を取っても赤を着ている人が多いが肌が白いので似合っている。ふつくらとした体格で、とても笑顔が良い。

ステンドグラスを真似たステッカーを購入し、出ると人が礼拝堂に入っていく。私たちも入ろうとすると20分待てというので、修道院のカフェでお茶をした。20分経過しても駄目。結局、英語の聞き違いだったのか午後2時まで待つことになり、先に町を観光する事にした。

この町の特徴の建物であるチューダー朝のザ・ロウズ(the Rows)は街のランドマークで、ここは雨に濡れずに歩けるショッビングセンター街。

雨もあがり時間があるので先に





城壁に登る。街が一望出来る。先へ進むと、ここに来る途中に見た時計塔の上まで辿り着いた。さらに行くところを探していたローマン・ハーバー (Roman Harbour Wall) が見えた。城壁一周は1時間位かかるらしい。私たちはもう40分位歩いたと思うが、雨が降ってきたので一周はせずに降りた。

そろそろ午後2時になるので大聖堂に行くと、やっと入ることが出来、聖堂内は観光客でいっぱい。大きな聖堂でたくさんステンドグラスが光に照らされ、彩色がまばゆく輝き、綺麗。

外に出るとまた雨。止むのを待ちがてら昼の食事をしていないので店を探す。チューダー朝の建物の店の下を歩きの階に上がるとベランダ風の吹きさらしのコーナー。注文は、いつものサンドイッチと、寒いのでマシユールムスープにした。キノコ味はなく美味しいとも、まずいとも言えない黒いスープだった。

今日は教会での待ち時間の多い観光。(英語の時間を聞き違い)

帰りには雨も止み、マンチェスターへ帰り着いたのは午後5時を少しまわっていた。

7月9日(土)

私たちはマンチエスターの住人のような振る舞いでキップを買う。

マンチエスター・ピカデリー駅からビートルズ縁の地リヴァプール (Liverpool) のライム・ストリート (Lime Street) 駅に到着。駅から歩いて20分のリヴァプール大聖堂 (Liverpool Cathedral) はイギリス最大の教会で世界で5本の指に入るといふ。大規模な聖堂なのでさすがにガラッとデカイ。ここでも医学を学ぶ日本の青年に会い地図をもらう。私たちは教会の斜塔(£4・25)に行くためエレベーターに乗り、さらに沢山の階段を登る。眺望はイギリス第2の港湾で美しいと言ふアルバート・ドック (Albert Dock) があの方向、右手に進めばビートルズのモニュメントやショップがある通りが見渡せる。

教会で見たアルバート・ドックへ。食事時。皆がビールを片手に食べている。店は込んでいて、私たちも隅の椅子に座る。いつも2人で分け合って食べるが、私の注文はパンサンドにリングが付いたセットにした。飾ったリングが載っているのかと思いきや、丸いリングがそのままドンと乗っついていて繊細さが無いが

「まあまあ美味しい」

水陸両用車が沢山のお客さんを乗せ海に入っていく。

ビートルズ・ストリーへのほうに行くといふ通りが多く、湾の周りにビルが建ちビートルズゆかりの物や雑貨が売られている。日本人のツアーとすれ違う。ビートルズファンが、この地を訪れるのかな。

今度はビートルズゆかりの通りに足を向けると建物の2階にビートルズメンバーのジョン、ポール、リング、ジョージ、それぞれがモニュメント像がある。

マシュー・ストリート (Mathew Street) という通りに

入ると、ビートルズがデビューした場所のギャヴァーン・クラブ (The Cavern Club) などがある。ビール



トルズ経営のショップを皆が写真を撮っている。しかし店の中にはお客さんが無いから迷いながら内部に入る。フィギュア、キャラクターグッズ、写真などを売ってい

る。デビュー当時のポスターのセピア色が昔の感じを漂わせている。ビートルズの全盛時代から何年になるだろう。彼らはもう若くはない。でも未だ人氣が衰えず、多くのファンがここを訪れている。私のようなミィーハ人間が沢山なのかな？ ビートルズ一色の觀光地と思っていたが見どころがある大きな街なのかも。

帰りの列車のある駅で3人の男性が乗り込み、私たちの通路の隣席に座った。すぐに車内販売が来て、その人たちは缶の黒にリングの絵を描いた飲み物を買って美味しそうに飲んでいる。

「ビールかな？ ジュースかな？」
と思つたので

「May I ask you?」(尋ねていいですか?)
「Is this beer?」(これはビールですか?)

と尋ねる

「サイダー」

という。

日本のサイダーと同じものだろうか？ まだまだ尋ねたいが英語が出ない。仕方がないか。のちにテレビで言っ

ていたリングから取れるシールドだったのかと思われる。

日本の列車は椅子を前向きにしたり二人掛けにしたり操作できる。固定された席の時は向い合わせだが、この国の列車は真ん中の席が向かい合わせで、そこから後向と前向きに座るようになっていて、席ががっしりと据え付けられている。イギリスが列車の發祥地だと言っけれど日本の列車はどの国を見本にしたのかな。

マンチェスターに着いたのは昨日と同じくらいの午後4時44分。何か冷たいものが食べたくてアイスを食べてから、ホテルへ帰る。

この近くに、あの「嵐が丘」の舞台の街ハワースや水道橋のようながあるが不便な場所なのと時間もないので諦めた。

7月10日(日)

今日は湖水地方に行くために車を借りる場所のあるランカスター(Lancaster)へ移動の日。

ホテルからスターフォード駅の路面電車の乗り場に行きキップの買い方を見てみると、買い方が解らないのだと思つたのか、中国の娘さんが私たちに話しかけて来る。その人は留学に来た生徒を迎えに来たという。

一緒に写真を撮りたいと言うのでお互い写しあつた。英語を聞きとれないが、何となく理解した。向こうは私の英語が理解出来たのかは解らない。

マンチエスター駅でランカスター (Lancaster) への列車を待つっていると、白い服にリボンの帽子が綺麗な黒人女性がいた。アフリカの国の正装だと思う。とても変わったリボンをぐるぐると回して作つた帽子。写真を撮りたくて

「Your clothes are very beautiful」 (あなたの服はとってもきれいですね)

「Can I take a picture?」 (写真を写してもいいですか?)

と言うと、その人は、私と自分のカメラを知らない人に渡し、私の肩を抱きよせてポーズを取つた。お互いのカメラに写し終わり、

「It was very nice to meet you」 (あなたに合えて良かった)

と言っていると列車が来ると言うので別れ、列車に乗車。その人は私たちと同じ列車に乗らなかつた。

列車は最初混んでいたが、しばらくして二人とも座れ、

どれ位乗つたのかランカスター駅。降りた人は少なかつたがその中に私たちより少し若い日本女性がいた。駅前にはひっそりとして店もない。その人も湖水地方に列車で行くと言う。店が無いと言うと、その人は英語で駅員に聞いてくれた。でも私たちはホテルが知リたかつたのに。

駅を出てタクシーの人に聞くと、すぐそこだと言ひ乗せてくれない。ランカスター城のほうに行つてみたが、たが探しても見つからず、歩いていると下り坂になり街に出た。食事をしてそこで訊こうとパン屋に入り食事を済ませ、訊くとタクシーに乗れと言う。大きい道まで出て、車を拾ひ乗車。どんどん遠くまで走る。ホテルは運動が出来る大きな広場がある町はずれにあつた。

ホリディ・イン・ホテルはストラト・フォード・アボーン・エイボンで泊まつたホテルの系列で、ビジネス用の簡素だが広くて新しい綺麗な建物だ。チェックインは午後3時なので私たちの到着が早過ぎ少し待たされる。

チェックインの後、散歩に出かけることにした。川のそばを歩くと花が咲き川からの風が心地よく、どんどんと足が進む。上に橋が架かつていて、水が落ちている。そこから人々が下りてくる。どうなっているか調べたい

ので上に登る。綺麗な水の用水路になっていて、皆が散歩したり、カヌーを漕いだりして、自転車でも走っている。ゴルフ場もあり、鏡のような川面は晴れた空、木々などを綺麗に写している。京都のインクラインのよう。もう少し進みたいけれど疲れると困るので引き返すことにした。



ホテルの近くにお店らしきものがない。
今日も早めの就寝。

7月11日(月)

タクシードレンタカーの店に行くと、そこは午前10時30分開店。1時間30分程あるので、近くの工場に荷物を預けてランカスター城の方へ散歩に行く事にする。川にかかる橋を渡り駅の裏の丘を登ると城に着く。入口に案内人と観光客の紳士2人がいた。同じように入場

すると、英語で説明してくれたが理解出来ない。しかしついて行くことにした。小さい裁判をする部屋や牢獄があった。壁には三角形になった年代の紋章のようなものが掛けてある。私の生まれた年を見つけ、そのペナントがショップにあれば欲しいと思ったのにない。魔女のバッジを購入。これは何かこの土地にゆかりのあるバッジだと思う。魔女狩りのあったのを聞いた記憶がある。

他にも何か無いかと見ていると、音が鳴り響き、外に出るように言われ外で待つ。消防車が来て、なかなか中に入れてくれず、帰る事にした。

帰国して1年後にテレビニュースで知ったのだが、エリザベス女王がランカスター城に来る当日に結婚式を挙げるカップルが、シャレで結婚式の案内状を出したと言う。するとエリザベス女王が来てくれたと言う。ランカスター城は由緒ある城なのか。私の本には載っていないが、なかなか良い所だ。

レンタカー店に行くと今度の車はBMW。外車だが今度、あまり驚きがない。ここからどのように行けばいいのか尋ね、出発。

なんとなく高速に乗り、ケンダル (Kendal) で下り、

左の方に行く。ネットで調べた道を進んで行くとウインダミア(Windermere)の街に入る。左のボウネス(Bowness)の方面に進む。右手にある小さな建物が私たちのホテル(Craig Manor)。建物の裏が駐車場でウインダミア湖(Lake Windermere)が見える。私たちの部屋は2階で駐車場に入る道の上にあり、風呂からもウインダミア湖が見える。

部屋に荷物を入れウインダミア湖へ。途中レストランがあり白い日傘のガーデンの所で人々が食事をしている。お腹がすいているというわけでもないが、私たちも真似をして日傘の下で楽しく食べた。

ボウネスに行く。湖は美しく緑の山と湖の風景がよい。ここに夕日が沈めばより綺麗だろう。

世界中から訪れる人気の場所なのだ。白鳥が水辺を歩いていて人懐っこく寄ってくる。

レイクサイド(Lakeside)に行く船のチケットを購入しようとする、行きの船はあるが帰り



の船がないと言う。今日、レイクサイド&ハーヴァースウェイト(The Lakeside & Overthwaite Railway)の列車に乗っておけば明日はゆつくりできたのに。食わずに来ていれば良かったか。

仕方なくピアトリクス・ポターの世界(The World of Beatrix Potter Attraction)と言う建物に行へいとする。が見つからず土産店のお姉さんに案内してもらう。ポターのおなじみのお話のシーン

「ねこのトム」「ピターラビット」

「りすのナトキン」「きつねのドーン」などのキャラクター人形が飾られている。絵本の中に溶け込んで、可愛くて大人をも楽しませる。

お土産のシヨップも充実していて、絵

本の動物が描かれたステッカー、絵本、カップなど色々なグッズがあり私たちも買ってしまう。

出口を出ると私達のホテルへ行く道に出た。ここだったのかと何度も歩いたのに迷ったのが可笑しかった。案内してくれた店でもお礼のつもりで、お土産を購入し、ホテルに帰る。



7月12日(火)

昨日行けなかったレイクサイド&ハーヴァースウェイ
ト鉄道に行くため乗船。湖面は静かで、小さな子ども連
れ家族の乗客がいっぱい。船から列車に乗り換え。蒸気
機関車はトーマス。緑色の木の葉と白い水の流れが綺麗
なレヴァン溪谷を左に眺めながら18分の旅を楽しんだ。
そこから引き返してウインダムニアに戻る。車をホテル
に取りに行き今度はヒルトップ (Hill Top) に前進。ウオー
タヘッド (Wathead) とアンブルサイド (Ambleside) の方
に行ってしまい、尋ねたら引き返せという。ターンを
していると尋ねた人が私たちの所に走って来て手首をぐ
るつとふり、こちらから廻れとジェスチャーで言う。

「一方通行だ」

ここにも親切な方がいた。

ホックスヘッド (Hawkshead) へ行く道は狭くて擦れ違い
をするとき、眼を閉じてしまうほど怖いと今日運転の友
は言う。大きなバスと出合うが何ごともなく進んでいけ
るから勧めたえた。ホックスヘッド湖が見えたが、ど
ちらに進めばいいか迷う。そこに外国のご夫婦が車で地
図を見ている。尋ねるとニアソリー (Near sawrey) は左
の方向だと言う。どんどん田舎の方に行く。ヒルトップ

(Hill Top) の駐車場に着き、

看板どおり歩くと、右に小
さい白い木戸があり小さな
シヨップ。その庭にはウサ
ギが遊んでいて、まるで絵
本の中にいるようだ。ポター
が愛した美しい農場。綺麗
な庭の先にはパンフレット
の写真のポターが立ってい
る玄関。私たちも同じよう
に玄関で撮影。

ここを絵本の印税で購入したという。

建物前の草むらに入館の待ち時間が書いてある。日本
のツアー客が私たちより後で来たのに早い時間のチケッ
トを持っていた。尋ねると会社で予約していると言う。
私たちも、すればよかったのに。でも英語が話せないか
ら駄目か。

待つこと40分ほどでやっと入れた。家の内部のポター
のお気に入りの調度品は、中国の物、日本の物などで可
愛く飾られている。1階から2階までの内部はどれも少
女的で、お話しの世界が見えてくるようで楽しい。



玄関の前の庭に出る戸はアヒルのお話しに書かれていると言う。2階の階段の所 庭に出る緑の戸、道路から入る白い木戸など絵本の中に、この家が描かれている場面が沢山ある。ヒルトップの写真が入った日本語版が売られていたのでそれを買う。

ナショナル・トラストにこの家を託したことを映画で知り、この地を訪れて、美しい自然を残すようにした彼女のことがますます好きになった。

ショップは小さいが、物語のグッズが沢山置いてあり、人でいっぱい。私たちも色々購入しホークスヘッドに戻る。

ビアトリクス・ポター・ギャラリー (Beatrix Potter Gallery) へと思ったが、これから行っても入館時間に間に合わない。入場しなくてもいい場所、アンブルサイドの橋の上にある家を見る。ここは今朝、迷った街だ。

この土地特有のスレート造りの2階建て橋の小さい家はブリッジハウス (Bridge House)で、土地の税金逃れのため



に川の上に建てたと言う。一部屋ずつの二階建てのよう。車を通りから小さな道に置き写真を撮る。

何処にもある話で、京都のウナギの寝床の奥まった家も、それかな。

今、ここはナショナル・トラストのショップになっているが、5時を過ぎ、閉まっている。

この町で夕食して行こうと探したが、車を置いておく場所がなく良さそうな店が探せない。揚げたフィッシュをテイクアウトする店。テーブルと椅子が置かれていたので、そこで簡単に食べホテルに戻る事にした。

7月13日 (水)

昨日迷ったウオーターヘッドを通り、ウインダム湖の上を周り、昨日と同じ道でホークスヘッドへ。駐車場が見つかり、すぐにビアトリクス・ポター・ギャラリー (Beatrix Potter Gallery) も見つける事が出来た。

しかしまた予約。ここも日本人観光客のツアーの人がいる。今度は待ち時間10分位。待ち時間の間に歩いて1分位のところにあるホークスヘッド・グラマー・スクール (Hawkshead Old Grammar School) を見に行く。ここ

はワーズワースが勉強した学校で、1階の教室が当時のまま残っているそうだ。机には彼が彫った落書きがあると言う。外館を見て、予約している時間なので内部は後回しにしてポターの夫の弁護士事務所に戻る。

ギャラリーの中は当時のままの事務所の内装で、2階にはポターの原画が暗い部屋に展示されている。水彩画だから日が当たると色が薄くなってしまうから仕方がない。数は少ないが貴重な物ばかりだ。毎年作品を入れ替えるらしい。何年ここに通えば、全部を見られるのだろうか。毎年来たいなー！

ホークスヘッド・グラマー・スクールに行くのを忘れてしまった。

グラスミア (Grasmere) へはアンブルサイド (Ambleside) の街を通り抜ける。ライダル・マウント & ガーデンス (Rydal Mount and Garden) を探していたが、右に折れれば良かったのに過ぎてしまった。先にグラスミアのワーズワース博物館とダヴ・コテージ (The Wordsworth Museum & Dove Cottage) に行くことにし、看板を見つけて駐車する。スコットランドの正装をしたおじさんに会い写真を写させてもらう。チェックのスカー

トに腰に短剣。チャールズ皇太子が良く着ているのを見るが、普通の人も着るのだと何か面白く感じた。

この建物はワーズワースが妹のドロシーや妻のメアリーと住み、執筆をして過ごした。自筆原稿や写真などゆかりの品々に生活ぶりがうかがわれる。

そこを出てA59の道を渡り町の聖オズワルド教会 (St Oswald's Church) へ行く。この墓地にワーズワースと妻メアリー、子供たちや妹ドロシーが眠っているらしい。妹の名前を良く聞くが、奥さんはどのように思っただかな？ やきもちを焼かなかったのかな？ 私ならいやだな。

教会内にあるイチイの木はワーズワースによって植えられたものだという。観光客が沢山いて、すぐにワーズワースの墓地と判る。

教会を出てすぐの店に有名な生薑菓子店があり、行くと(テレビ局?)

撮影しており私たちが買うところを撮っていたので出たがりの私たちは笑顔でふるまった。本当に放映されたかな。



美味しいのだと思ひ沢山買う。しかし、日本に帰って食べると、生姜の味が余りせず、味はいまいちだった。すぐに食べれば美味しかったのかな。

ライダル・マウント&ガーデンズに戻り、左に少し入り突き当りの道に車を止めて入館した。綺麗な庭が続く丘を少し下り、湖が見える所に椅子が置かれていた。ワーズワースはここに座ってライダル湖を眺めるのが好きだったという。椅子が置かれた風景は主を待っているかのようで、ノスタルジックな雰囲気浸る。



ワーズワースが晩年を過ごした白壁の家は中に遺品や肖像画が展示され、リビングルームが広く明るい。観光客はひとりもなく、係の人の監視もない。私たちが一人占めで、この住人のように部屋を歩き回っていると、2階の窓から私達の手BMWが見えた。レンタルしているのですが、可愛い我が家の車です。

その後、ウインダムニア湖に戻り、景色を見ながら三段のアフタヌーンティーが味わえるというので、3時のおやつに行く事にした。ウインダムニア湖の近くで20分だということに見つからない。湖の傍のホテルで聞くと15分と聞かえたので、そのホテルに車を置き歩いて行く。

しかし、50分。聞き間違えたうえにアフタヌーンティを食べられると思つたが、そこは、ただのカフェ。ウインダムニア湖が見えるガーデンのテーブルは値段が高いがやはりそこがいいと、紅茶とケーキでも4、景色の良いガーデンにした。ウェイターに運んでもらい、写真を書いてもらうが、チップかなと思つたが払わないで済みます。

私たちがホテルに帰ろうと歩いているとカフェで外国人の親子に写真を撮つてほしいと頼まれた、その人たちが車を止めてくれ、乗つけてくれる。降りたい所で

「ストップ」

を言いなさいと言われ、車を止めているホテルの近くまで送ってもらえた。ヘンピなところだったので親切に言ってくれたのかな。

今日で湖水地方とお別れ。ウインダムニア湖に夕日が沈

むのを見ようと湖へ。しかしホテルから見るのが良いと知り、急いでロビーのカウンターでティを味わいながら、湖の風景美や避暑地ともいえる、この田舎の自然の素晴らしさを味わえたのと、この先の旅にも乾杯をする。

7月14日(木)

アンブルサイドやグラスミアの湖水
地方と別れを惜しみながらケズイック

(Kewick)に向け進む。ハニンは

ストーンヘンジのようなミステリアスな規則的に並ぶカッス

ルリッジ・ストーン・サークル

があり、寄つていきたいが、エディンバラ

(Edinburgh)への列車は急にキャンセルになるとい

うので観光をあきらめ先へ急ぐ。日本出発前はカーライル

(Carlisle)までどのくらい時間がかかるのか全く情報がなく心配

していた。ウインダムニアからカーライル (Carlisle)へは

2時間ぐらいで行けるらしい。

高速に入り、いつ出たのか判らずに街に入っていた。

公園に店と駐車場があり、ハンバーガー店で昼食にした。



いつもは、サンドイッチなのだがハンバーガーを食べた。

ここで車の返却店を聞くと5軒位行き過ぎていたので、戻つてガソリンを入れ、車を返却。

タクシーでカーライル駅に行く。人けが無い駅だがホームは沢山あり、色々な種類の列車が通る。友は列車を見に行っていたので、ホームのベンチで待っていると、地元的女性なのかスイカを持っていて、私に「食べますか」と言ってくれた。

「No thank you。 I'm full because I had lunch near the station」 (ランチを駅の近くで食べたのでお腹がいっぱいです。)

と、言うとその人は食べ始めた。親切な人ばかり。

エディンバラまではグラスゴー

(George Sq) 周りで行くのだ

と思っていたが、ダイレクトで

1時間30分位。もつと遠いと思っ

ていたので暗くならないうちにホテ



ルに着ける。

着いたエディンバラ駅 (The Edinburgh) は大きく、高台に城が見え、街は線路を挟んでオールド・タウンとニュータウンに別れている。丘の上からエディンバラ城が街を見下ろし、イギリスの始まりのスコットランドの街の偉大さが感じられる。

スーツケースを持ってホテル探しでウロウロ。韓国の青年がスマホで調べてくれる。どの国の人もやさしい。長く、歩き、やっとホテルを見つける。ホテルはニュータウンの中にあるホリデイ・イン。建物が古く大きなビルの中の一角。悪くはないが豪華でもない庶民のホテルだと思う。

イギリスの何処のホリデイ・インも豪華ではないが、間違いが無い良いホテルだと思う。豪華さを求めなければね。

部屋に荷物を置き明日のネス湖 (Loch Ness) へのツアーの集合場所を探しに行く。私たちが駅からホテルにきた道は遠回りだったようだ。地図で調べて判る。

駅まで調べた道を行き線路の上に架かるノース・ブリッジ (North Bridge) を渡り、オールドタウンに入る。



ロイヤル・マイル (Royal Mile) の道はひしめくように立つ古い大きな石のビルが林立して石畳の道が入り組んでいる。町は中世の趣が魅力である。

その道でスコットランドの服装、チェックのスカートの男性がマグパイで音楽をかなでている。私には男性のスカート姿が物珍しい。チェック柄は日本の家紋と同じだという。長い歴史のあるこの土地にはこの姿が似合うのかなと思えるようになってきた。

ロイヤルマイル道に明日行く店がある。が解らないので旅行店で尋ねると、すぐそこ言うが無い。同じ店に戻ると道の斜め前の店に案内してもらえた。

店を確認後、まだじゅうぶん時

間があるので最初に見た公園に行く。そこに植えられた綺麗な花々で100という文字が描かれている。今年は何かの記念なのか。

階段を下りて行くと公園は色とりどりのバラが咲き乱れ、とても美しい。その公園の横の小高い崖の上には堂々とエディンバラ城がそびえ建つ。公園の中のスコット・



モニュメント (The Scott Monument) を見ながら進んでいくと美術館があり、ここにも記念の旗が掲げかけられている。その建物はガラス張りの店で、食事している人が見えたので私たちも夕食にしようとする。サラダに鶏肉とビスケットが乗っているのと、もうひとつはサラダにカニ身。カニを美味しくいただく。

帰り道に北海が見えるので写真を撮りに行き、道が解らなくなる。元の駅に戻りホテルに帰り着く。

7月15日 (金)

朝早くからの出発。

ネス湖へのツアーは、日本人は私たち2名、運転手と添乗員を兼ねているイギリス人の英語の説明が判らない。トイレ休憩の時、美味しいケーキ店があると聞いたので買つてバスに戻ったが誰も来ない。

「時間を言っていたかな？」

ケーキを食べながら待つ。運転手や乗客は店で食べていたようだ。

山を越え進んでいくとインヴァネス (Inverness) への列車の線路が見える。幾つかの湖やグレンコー (Glencoe)

溪谷に下車。この溪谷は氷河が削った雄大な谷で、「ハリー・ポッター」のロケ地らしい。英語での説明。インヴァネス (Inverness) の町のネス湖に到着。

チンプン、カンプンの英語のうち2時と3時30分だけ聞き取れた。どのように過ぐせばいいのか戸惑ったけれど、同じツアーの人と同じようにしようと思いつく。バスの乗客は食事を購入している。私たちも買い様子を伺い川の傍で食べていると、湖からヨットが入り川が堰き止められ、又つぎのところが空き、

運河になっている。しばらく見てい

るとツアーの人達がネス湖の方に向かって行く。そこは船着き場で、2時に乗船だと2人は納得。私たちも同じように船へ。船上で湖の説明を聞くが、多分あの説明だろうと写真撮る。



長い首のネッシーが見られればいいな。でも近年になり写真がトリックによるものであったのがばれてしまったので夢が無くなった。ネス湖はとても大きく長い湖。1時間ほどの乗船で船は引き返す。

ツアーの運転手の言った3時30分はバスに集合する時間だった。

帰路はウイスキーの故郷、塔を思わせる屋根が印象的なスコッチの蒸留所や、

沢山の羊が飼われている所などでトイレ休憩があつた。その土地の有名なスコッチのお店でテイスティ

ングが出来た。また次の場所では、タータンチェックのマフ

ラーの店があり、買うことを薦める。私は首が短いのでスカーフ、マ

フラーはいらないがイギリスの思い出に購入すれば良かったかな？

次に広い原野に降りる。戦場のあとで兵士の像が立つ。

カロードンの古戦場跡と本に書いてある。ここの広い原野で沢山の人が命を落としたのだらう。何か物哀しく寂しい気分になる。ここの地で今もたくさんの人が眠っているのだらう。悲しい。

その後降りたのは、滝を見たが、少し高い石の所から落ちる水のせせらぎのよう。

落ちる水のせせらぎのよう。



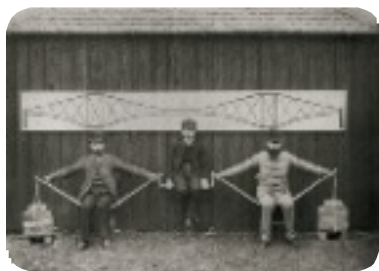
ツアーの最終はエディンバラ近く

の北海のフォース湾 (Firth Forth) に架かる紅いひし形が連なる鉄橋。それを見ながら写真タイム。

「ひし形の変った橋だなあ」と眺めていた。列車が橋を通る。

この橋がスコットランドを南北につなぎ時間短縮できた。強風に耐えるだけの設計が求められ明治時代グラスゴウ (George Sq) 大学に在学中の渡邊嘉一が設計に加わった。手をつなぎあい支えをすれば強くなると写真で構造を説明したのがスコットランド銀行が発行する£20札の片隅にあるらしい。このフォース橋は8年かけて完成し世界遺産になっている。

ここにも誇れる日本人がいた。この事を英語で説明されていたのだから私たちは判からずにはいた。後に、テレビの世界遺産の番組で



知ることになった。

今日は長い距離のわりには早くエディンバラに着く。観光客は運転手と挨拶していたがチップを渡していたのを知らなかった。握手はチップを渡すためだったのか？外国にいることを忘れていた。いつものように悪いことをしてしまった。

7月16日 (土)

ホテルの朝食に行くと3人連れの日本人がいる。その人たちはマン島や他の島は良かったと言ったが、英語が出来ない私たちには無理な話。

今日は雨。エディンバラ駅から出ている一日乗り放題のバスで観光。バス停を降りると、すぐに宮殿。ホーリールード宮殿 (The Palace of Holyroodhouse) は、イギリス王室がスコットランドを訪問時に住居として使用しているらしいが、それ以外の時は一般人の観光客に公開して



いるという。今日は公開している。

「ラッキー」

でも女王が滞在していれば、オープンなイギリス王室のこと、女王が外に出てきてお会い出来たかもしれない。

日本語の音声ガイドを借り、内部を見学。建物や内部の部屋、置物、何もかもが優雅で高級感がある。やはりイギリス王室はすごい財産を持っていると感じる。それに内部の見学料金が儲けになるからね。宮殿からバスに乗りうつするがバス停が見つからない。大雨の中、ウロウロ探し回りやつと乗車、駅に向かう。

バスの運転手が友達に

「貴女はビュティフル」

とプロポーズする。

「名前は」

と尋ねるなど、まるでイタリアに居るよう。あの人はイタリア人だったかな？

駅で違うバスに乗り換えて城へ。ロイヤル・マイルの道に出てから降りる。昼ごはんにする為に城へ登る坂道の途中にある店に入る。メニューが写真にしてあり、ムービーの料理を見つけた。この土地は北海だから海のもの

が良いので、それにした。海の香りがして貝も柔らかくとても、とても美味しい。

雨が上がりエディンバラ城への坂を登ると広場に椅子が置かれ、式の会場のようになっている。ここも何か式典があるよう。正面の城壁にはスコットランドの英雄「ウイリアム・ウォレスとロバート・ザ・ブルース」の像があり、岩山は天然の要塞。門を入ると入場券を買うのに多くの人が列をなしていたのでトイレを交代に行き待つ。ここも、音声ガイドを借り場内に入る。議会場となったグレートホール。聖マーガレット王礼拝堂は小さな可愛いチャペルで、光が黄色く輝いている。エディンバラで最も古い建造物といわれている。必見のスコットランド王家の象徴

「運命の石」

が保管された部屋を尋ねたいが英語で何と言うのか解らずに困る。その名は



「ストーン・オブ・デスティニー」

(Stons of Destiny)という。その石と台は戴冠式の時にはロンドンまで運ばれるらしい。

「この剣を抜いた者がこの国の王となる」



と言い伝えられた石に刺さった剣。これほど重要視される石なのか。私には何でもない石と台に見えた。椅子はウエストミンスター寺院に置かれているという。王室の次期戴冠式を早く見たいもの。エリザベス女王に悪いかな。

建物の外には砲台が何台も街に向けて並んでいる。毎日1時に空砲を鳴らすという。ここからは北海や昨日、ネス湖からの帰りに見た赤いフォース橋も見え、またオールドタウンとニュータウンを結ぶノース・ブリッジと美しい街並みが一望できる。エディンバラは巨大で中世の風情が漂う素晴らしい街だ。

城の外に出て聖シャイルズ大聖堂 (St Giles Cathedral) に向かうと、閉館時間が迫っていて急いで内部へ。ステンドグラスやパイプオルガンを見ていると閉館時間がき

て蜜の光の曲が流れた。どの国も閉店の曲に使うようだ。少しの時間だったが見る事が出来て良かった。

ロイヤル・マイルの道で日本人の女性に会い話す。その人はここにゴルフをするために来たと言う。

そうだ此処はスコットランドの名門セント・アンドリュース (ゴルフ場) ゴルフ発祥の地で

「世界で最も難しいコース」

と言われている。日本人もここまで来てゴルフを楽しめるようになったのだ。昔アレビで

「なるほどザ・ワールド」

を見た時には私たちも海外に行けるようになるとは思わなかったが、今、私でも海外に来られるようになっていく！



又バスに乗り、馱前の公園の中にあるスコット・モニュメントに行くことにする。作家サー・ウォルター・スコットを記念して作られたゴシック様式の美しい尖塔で、世

界1の大きさを誇るといふ。塔の通路は狭く、上から降りてきた外国人が手を、ぐるぐると回し眼が回るジェスチャーをする。段々と狭くなる階段を頂上まで上がると、ここからは丘の上のエディンバラ城が向かい側に、ニュータウンとオールド・タウンの境が真下に見える。色々な角度から街を眺めたが巨大かつ、美しい景色に魅了された。外国人がジェスチャーでしていたように小さい塔を回りながら降りると本当に眼が回る。

カールトンヒル (Calton Hill) は雨で行くことが出来なかったし、まだまだ見る所があり、気高い歴史の深さ、王室の偉大さをまざまざと見せつけられた。名残惜しいが古都エジンバラに別れを告げ、明日はロンドンに帰る。

7月17日(日)

タクシーで駅に行く。9時30分発の列車での1等席。外国人のご夫婦とテーブルを挟んで向かい合わせの席だ。英語で会話したいが、続かないだろうと諦める。

北海を眺めながらサンドイッチとジュースの簡単な昼食が付いていて食べる。

私達が来る時に使ったレール線ではなく【地図上】の、右側の北海側を下に走る線でロンドンまで戻る。5時間

で着くという。何とイギリスは土地が小さいと感じる。色々な駅を過ぎヨーク駅に止まった。ロンドンに近い。

着いたのは初めてのキング・クロス駅 (King's Cross)。ハリー・ポッターの映画でプラットフォーム9と4分の3のロケに使われた場所がここらしい。9のホームに行つたが、それらしきものは無い。訊いてみると駅を出るように言う。改札を出てびつくり。そこには半間ほどの壁にレンガの絵の紙が貼られ荷台のカートが置いてあるだけ。映画ではカートを押し、レンガの壁に消えていく場面。見物人はカートを押して撮影している。重い荷物を持つて探したのがアホらしく感じる。



ここからタクシーで本日の宿、ミレニアム・グロースター (Millennium Gloucester) ホテルまで£17。ボーイが沢山いてセキュリティもしっかりしている。受付には日曜だけ日本人スタッフが居る。5階の食堂は、何回でも食事が出る一日£15のカードを薦められた。安いし楽だ。部屋は7階の良い部屋にしても値段は変わらない

という、お薦めに従ってそのようにする。

エレベーターの5階からは、私たちの部屋のカードを通さなければ上に進まない。部屋に案内されてから外出する。観光にとっても便利な場所です。地下鉄グロスター(Gloucester)駅を降りて右に曲がればすぐホテル。

ピカデリー・サーカス駅の三越に行くが閉店している。ついでに以前カメラのチップからCDに入れてもらった店に閉店間際に立ち寄った。まだまだ撮影したいから、またCDにする。私の用は終わったが友はCDにするかを悩み遅くなり、店のシャッターを閉めるので外で待てと店員が言う。やはりイギリスの店は閉店が早い。

ホテルに戻り夜の食事。薦められたカードを使いレストランに行く。台にスプーンが並べられた内にエビが乗ったもの、チーズや野菜、日によつては焼き鳥の様なものやピーナツが並ぶ。おつまみのようで少ししか入っていないので面倒。私たちは同じものを何回もとるが、ここに来る人はデイナーを外で済まし、食後のワインを楽しんでいるようだ。ワイン付きの食事だったので便利で安くついたかと思うけれど。

日本人の親子づれが食事をしていて、声をかける。橋

子をすすめられた。どんな所を観光したのか尋ねる。コベント。ガーデン(Covent Garden)とロイヤル・アルバート・ホール(Royal Albert hall)のコンサートを薦められる。地下鉄とバスに使えるトラベルカードを買えば便利と言う。明日から1週間使えるのを買うことにした。

このホテルは風呂が広く、窓は大きく部屋も良い。

しばらく眠っていると何時なのか解らないが隣の部屋から話し声がしてくる。暫く我慢をしていたがうるさくて寝られない。

「壁を叩いてみた」

少しの間話し声は止んだが、又話します。明日カウンターに言うことにしよう。

7月18日(月)

朝、部屋を出ると隣の部屋からアラブの子供たちが出てきて私たちを見ている。昨夜、壁を叩いたから、どんな人かと隣の部屋から見に出たんだと思う。

「あなたたちが悪いのよ」

と言いたい。

カウンターで

Next room noisy, can I get to change, when does

the next room leave?」(隣の部屋がうるさい。部屋を変えて。隣の部屋はいつまで居るの?)

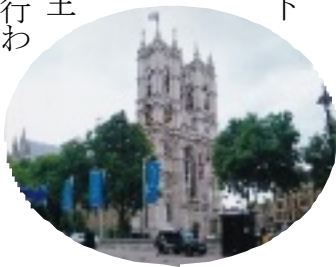
と聞くと一か月後という。やはりアラブ人はお金があるのだなと感心する。私達は5日だからなー。7階の今いる部屋と全く反対側の部屋はどうかという。同じ形の部屋なので替えてもらうことにする。荷物の移動を頼みホテルの朝食に出掛ける。

食事付きのホテルに宿泊すれば朝食は大抵バイキング方式だ。沢山の料理が並んでいたが、日本のおかゆと韓国のおかゆを一緒にした様な物など色々な国の料理を真似ているようで美味しくない。どちらの食事も良いとは言えないが明日の朝は5階でカードを使って食べようという話す。

昨日、教えてもらったように地下鉄のカードを購入。それを使ってウエストミンスター

(Westminster Abbey)へ行くぞ、

沢山の人が並んでいる。我々も並ぶ。十字架を形どった屋根が英国王室の教会で歴代の国王の戴冠式が行わ



れてきた。

内部に入ると、ここはウィリアムとキャサリンが結婚式をあげた教会。テレビニュースで結婚式を見た時は広く感じたが、内部は意外に小さく思う。教会の祭壇部分や横の部屋を音声ガイドに案内されて廻る。王室の写真が飾られた部屋があり家族の写真が沢山。しかしダイアナの入った写真は一枚もない。

映画「ザ・クイーン」での

「もう王室の間人ではない」

のシーンを思い出す。見事なまでにダイアナを意識し、排除した部屋だ。

ストーン・オブ・デイスティニーの椅子が見つからなくて尋ねると28番だという。判らないので諦めて出口に行く横に飾られている。エディンバラで見た、あの石と台、そしてこの椅子はどのように使われるのだろうか。想像を巡らす。

次にビックベンに行つて入ろうと思ったが14時30分からと言われた。2時間あるので

「ランチにしよう」

とナショナルギャラリーの中が良いと訊いていたので行

く。サラダとイワシ2匹を分けあつて食べる。日本的な魚が何となく懐かしく、味も美味しい。

まだ時間もあるので遠廻りだがザ・マルの道に入り、セント・ジェムス・パーク (St James's Park) を歩いて通り抜けた。リスが何かを食べていてほつぺを膨らませモグモグと早く動く口がとても可愛い。

ピックベンの入館の列にもどる。セキュリティが厳しく、顔写真をとられる。その写真のカードを首にかけて待たされる。カードをかけられた時、私の口から

「ネックレスするの？」

とふと言葉が出た。係の人は笑っている。荷物を預けなければいけないので大事なものを腹に巻く。廊下に進みベンチに座らされて長く待たされた。ドアが開くと前方で椅子に座っていた人が中に入る。今度は私たちが、そこに座る。やっと中に入ると、議会で一人の人が質問していた。可笑しい事を言つたのか皆で笑つていた。少し会議を見て出る。次を見ようと階段を上がろうとしたが行かせてもらえず、外に出た。

時計塔に登りたかつたなあ！

近くのハンケティング・ハウスを探す。道を歩くおじさんに尋ねると

「英語の文字を見せよ」

と言う。私達はHからの英語を探していたがBでバンケティング・ハウス (Banqueting house)。カタカナ英語で書いていたのでは駄目だと悟つた。

中に入ると広いホールにルーベンスの天井画。天使の絵が何人も描かれている。ルーベンスは、よくその絵の中に自らを入れて描くと言う。この絵にもあるのではと探したが判らない。

地下鉄でホテルに帰る。グロスター駅を降りてホテルまでの曲がり角に露天があり果物が売られていた。買いたい、ホテルの朝食の時にもらえるから我慢、我慢。

夜、カードを使い夕食にワインを飲んだので酔つて気分が良い。近くの外人達の3夫婦はワインを片手に、おしゃべりしていて楽しそう。

「You look very happy。I want to join but I cant speak English。」(楽しそうに見える。仲間に入りたいが英語が喋れない)

と言つてみた。すると日本人と思つて

「津波」

と言葉が帰つてくる。

「Thank you」だけ返すだけ。言葉が続かない。英語ができれば楽しい会話ができたのに。

7月19日(火)

朝、今日はチャリング・クロス(Charing Cross)駅からステイブル・ハースト(Staplehurst)駅に行き

「英国」で最も美しい庭

と賞賛されるガーデナー憧れの聖地のシンシングハースト城ガーデン (Sissinghurst Castle Garden) に1時間かけて行く。

チャリング・クロス駅でキップを買おうとすると9時30分以降に安くなるので待て、と言う。時間があるので外を見学。そこはトラファルガー・スクエア。こんなに網の目のように地下鉄が敷かれているので驚き。

ステイブル・ハースト (Staplehurst) 駅を降りた人は6人位だった。ガーデンまでバスが出ているので探していると外人のご夫婦が

「シンシング・ハーストに行くのか」と尋ねてきた。

「Yes」言つた

「タクシーで一緒に行かないか」

と言う。喜んでお願いした。タクシーを見つけて来てくれたので乗り込む。どこから来たか、どれだけ居るのかと聞かれた。そのあとも話しかけてきたが、私たちが英語を考えている間に、解らないのだと思って運転手と話した。これまた英語が出来ないのが悔しい。タクシー代の半額を7を払いご夫婦と別れる。

シンシングハースト城ガーデンでチケットを購入の時、トラストの会員かと尋ねられる。ここもトラストに守られているのだ。

門を入ると塔が見え、中庭は花が植えられ芝生も綺麗に刈られている。牛小屋だつたと言う部屋には昔の戸棚や本、こここの住人の絵が掛っている。前の塔に登ると回りの庭の全景が見える。華麗な



バラ園、ハーブガーデン、観葉植物や
白い花で埋められた上品なホワイト
ガーデン、黄色の庭、紫の庭など
それぞれに区切られ、さまざま
な花が綺麗に植えられ咲き誇つ
ている。ただただ感嘆の言葉
ばかり、すばらしい。



花壇から外は果樹園で、リン
ゴの木が植えられ実がなっている。
その庭に置かれていた椅子に座り、
ホテルから頂いたリングゴとバナナでお
昼ご飯にしたが、このリングゴを取ったのかと思われな
いようにバナナを見せながら食べる。塔と綺麗な庭を眺
めながら、とても気持ちの落ち着いた時間を楽しむ。時々、
タクシーで一緒だった夫婦と出会う。お互いに交わした
のは

「Wonderful」 (素晴らし) 「Beautiful」 (美し)
の言葉ばかり。

畑もあり夏の野菜も植えられていて、空の色が青く、
この景色をより綺麗に見せている。

今日は雨の予報だったが雨に合わず良かった。



ショッピングに行くと、あのご主人が帰りもタクシーでと声をかけてくれ30分後に会おうと言ってくれた。タクシーも呼んでくれる。帰りのタクシーで

「Thank you for inviting me。 I am lucky」 (誘ってくれてありがとう。ラッキーです) と言った

「Me too」 (私も同じ) と言ってくれ、別れる。

シンキング・ハースト駅には駅員がいないが、私たちは往復キップを買っていたので世話なしだ。20分待ち乗車。チャリングクロス駅近くまで来ると白いつり橋が見え、あそこを歩こうということになる。その隣の橋は今乗って来た 鉄道の橋。ロンドン・アイ近くまで歩きすぐに引き返しいつものように早くホテルに帰る。

7月20日(水)

セントポール大聖堂 (St Paul, s Cathedral) には、ディストリクト線とサークル線のどちらでも行ける。モニュメント (Monument) まで行きセントラル線に乗り換えた。なかなか乗り替えるの駅が遠い、バンク (Bank) と言う駅から乗り替える。セントポールズで降り、こちらかなと行

くが、見つからない。ぐるっと回ると大聖堂入口に着く。見上げると、のしかかって来るように塔が大きい。

チャールズ皇太子と故ダイアナ妃の結婚式が挙げられた教会。音声ガイドを聞きながら進むと天井画が金で描かれ美しい。ドームに上れるので階段を行くと天井画が大きく見えてくる。ドームの周りの回廊に出る。ある位置で話すと反対側でその話声が聞こえるのでささやきの回廊と言われる。内緒話が出来ない。

階段の途中の椅子に腰をかけていた男性が私の顔を見て笑いながら汗を拭いている。ドームの階段500何段と書いていた。確かに疲れた。屋上に出ると市内が一望できる。ロンドンブリッジが見え教会のタワーが目

前に立ち、その下には放射線状に白いタイルが伸びている。これは今、二重地所のテレビコマーシャルに使われている場所。帰国後テレビで見て

「あそこだ」と感激。

聖堂を出て放射状のタイルの場所の建物には人々が食



事をしている姿が目に入る。我々も店に入り、またもやサンドイッチを注文。鳥肉に野菜と、トマトと野菜がトーストの上に乗っているオープンサンドを選ぶ。ほとんどいつも昼食はお決まりのサンドイッチだ。平日なのに沢山のビジネスマンのような背広姿の人が1時過ぎに食事をするのは不思議。

「仕事しなさい」

と言いたくなる。

地下鉄の駅を探す。歩いている人に聞くと

「Is there a station near here?」(近くに駅がありますか?)

と言わなければいけないのに「Near here」を先に言ってしまう。セントラル線を教えてもらい、ホルボーン(Holborn) 駅でピカデリー線に乗り換える。コヴェント・ガーデン駅(Covent garden)で降り、シユビリー・マーケット(Jubilee Market)に行く。古着、食品、アンティークなどが並べられている。映画「マイ・フェア・レディ」でイライザが花を売っていたシーンのロケ地としても有名な。本当に有名な場所なのだろう。沢山の人の波をかき分け道にでる。

結局テームズ河近くまで来た。教えてもらった名前で

はなく大きなエントランスがあり、庭には噴水があるサマセット・ハウス内のコートールド協会ギャラリー(Courtauld Institute of Art Gallery)。その一つの建物物が印象派のコレクションの作品の数々が展示しているのをぞろぞろ支払い鑑賞。ゴッホの自画像、ドガ、マネ、ゴーギャン、セザンヌ、もちろんシスレーもあり、私の好きな印象派ばかりなので嬉しい。

この後はミュージカル「Les misérables」を見る為にウェスト・エンドへ行く。でも今日の席がないと言う。仕方がないので帰ろうとするとスタンディング席ならまだ10であるという。また出直す日がないかも知れないので入ることにする。すでに開演しているので、映像で10分見ってから舞台の幕間に案内され席の後ろに立つ。立ち見の人も意外にいる。舞台は見やすく、人物も近くに見える、ニューヨークで見たのより良く見えたが、この舞台のセットは質素でチャチイ。舞台は迫力があり、英語はわからないが何となく判り楽しく鑑賞した。

次に明日のツアーの待ち合わせ場所、ヴィクトリア・コーチ(Victoria Coach)を下調べに行くが見つけられない

い。またも、あつちこつちして、やつと、バスターミナルを探し当てる。ここからいろいろな地域に行けそうだ。

明日の朝、地下鉄の出口を間違えないかなと話した。まさかと友は言う。しかし

7月21日(木)

ヴィクトリア(Victoria)駅を人の列につられ出て、信号のところで間違いに気付く。昨日

「まさか」

と言ったのが本当になり反対側の出口に出てしまう。

バスターミナルからのツアーは日本人も多かったが、外国人のお客さんもある。ガイドはイギリス人で日本語と英語で案内。

バス(Bath)に行く道はM4の高速を走りM4を降りて田舎道を進む。バースの街の半円状に連なる建物、ナンバー・ワン・ロイヤル・クレッセント(Number One Royal Crescent)をバスの中から見る。ここにはバスから降りしてもらえない。大きくて円形の建物は全体が写真には入らない。

次にローマ人が築いた温泉地のローマン・バス(The Roman Baths)に着き降りる。中に入り、お湯が湧き出ている所や神殿跡、ミネルヴァ頭部像を見る。飲める温泉水があると本にあつたが見るだけ。添乗員はお湯には手など入れないようにという。期待をしていたが、余りにも見せるだけという感じた。イギリスの観光の一つだと思つが私的には期待外れの気がする。

待ち合わせ場所のそばの川にパルトニー橋がかかり遊覧船が浮かんでいてとても綺麗で、川べりを進み橋へ。橋の上は店になつている。バースの町はすり鉢のようになっていと思う。



次はソールズベリー(Salisbury)に向かう。バスから車を借りてコッツウォルズへ行く時にと調べた道がこのA4の道だなど思いながらバスに揺られる。英国で一番高い尖塔のソールズベリー大聖堂が見える。ここにはマグナカルタの原本や、旧約聖書を描いた壁画、エリザ

ベス1世の直筆の手紙等が収められている。マグナカルタ（大憲章）があるという。マグナカルタとは何だろう。

イギリス王がフランス王位継承権を主張した「百年戦争」で敗戦に怒って王の権限を制限する文書の署名を交わした。王教会の自由や市民の自由などの基本的権利を規定。

これがそうなのか。

大聖堂は、水に映るステンドグラスは綺麗。古い建物なので一本の柱がゆがんでいて怖い。

そこから少しバスに乗っていくと、

なだらかな麦畑の平原にストーンヘンジ（Stonehenge）が忽然と現れる。

駐車場から道の下のトンネルを抜けると、緑の草の上に巨石が起立し、その上に横石を載せた石柱がいくつもあり大きなサークルをつくっている。これは不思議なミステ

リースポットだ。その不思議が味わえる。

いつ、誰が、何のためにの、この石の不思議ゾーンを見る為に沢山の観光客がこの地を訪れ、サークルの



回りを取り囲んでいる。

やはりイギリスの旅で、ここは外せない観光地。

7月22日（金）

今日から帰りに便利なパディントン駅近くにホテルを移動。次のホテルのチェックインまでの間このホテルに荷物を預けて置く。リージェンツ・パーク（Regents park）の中のクイーン・メアリーズ・ガーデン（Queen Mary's Gardens）に咲くバラの花が見たい。

サークル線のベイカー・ストリート（Baker Street）駅で降りるとすぐに入口に着く。

色々の種類の花で埋め尽くされた花壇が続き人々を和ませる。途中道が分かれていたが、まっすぐ進むと池がある。犬を散歩させている人に尋ねると池を渡れと言うので行く。また分かれ道で迷っていると、先ほどの人が来てサークル状の囲いの中の公園まで案内してくれる。そこ

こは以前と違う植え方で同じ色のバラを一つの固まりにしている。レッド、



ピンク、イエロー、ホワイトなどの花が満開でかすかにバラが香り嬉しい。この公園も大きくて東京ドームの40個分と言つ。

この近くにビートルズのアビーロード (Abbey Road) の歩道があつたのを見逃してしまふ。

ホテルに戻りタクシーを拾ひ、次の宿クイーンズ・パーク・ホテル (Queens park Hotel) に行く。最初に泊まつたホテルに近い。ネットで取つたので部屋も狭くダブルベッドだ。シングルベッドの部屋をと頼んだが、今日は駄目で明日ならと言つ。どうやって寝るか?。2人とも背が低いので横に寝ようということになり、足をベッドから、だらんと垂らして寝ることに決め外出する。

イギリスに来たからには是非ともアフタヌーンティを味わいたいと思う。お土産用の紅茶を買うためメトロポリタン線でピカデリーまで行く。訊いていた店「フォーナム&メイソン」 (Fortnum & Mason) 2階がお土産店で4階ではアフタヌーンが味わえる。ちょうど2時からのお茶が出来るのでカウンターで予約なしでお願いした。

沢山のテーブルがセツトされている。本にも載つていて王室御用達の店と訊いたが、客は私達と、少し離れた所に1組だけ。後から予約の人が来たと家族づれが来たのみだ。

ティールームのリッチな三段重ねのサンドイッチは、日本では卵や野菜が沢山挟まれているが、イギリスのものはジャムだけとかスモークサーモンなどで、キュウリは挟んでいない。一種類を挟んでいるだけだ。ケーキは甘く、スコーンは固くて味が無い。美味しくないが値段は高かったという記憶しかない。私は余りジャムをつけないので色々の種類は知らないが蜜とバター味が美味しかった。が甘いものばかり。

種類の違う紅茶を注文して二人で分け合った。日本人らしい店員が通рикаかったので話しかけると

「お勧めのティをお変わりしましょうか」

と言ってくれた。もう少しほしいと思つていたし、日本語で話してくれたので緊張がとけた。その人は紅茶の修業に来ていると言つ。



がんばれ日本人！

2階の土産店には色々な紅茶やジャムなどがあり、悩み抜いた末に一番軽い嵩張らない紅茶をお土産にする。

このあと、以前ホテルの日本人の親子づれが教えてくれた、毎年夏に開催される英国最大のクラシック音楽祭に行く予定にしているので土産を置きに一度ホテルに戻る。

ケンジントン公園を抜けて行くと「プロミス」のコンサート会場、丸い建物のロイヤル・アルバート・ホール(Royal Albert Hall)が見えてきた。奥の建物でチケットを購入しようとしたが、またもスタンディングの席だけだと言う。ミュージカルも立見席でじゅうぶん良かったから入場することにした。オーケストラの前の真ん中に座り待つ。席がないがすぐ前で良い場所だ。演奏が始まると立つ人、寝る人、色々のスタイルで聴く。こんな方法で楽しむのか！。男2人(オカマ)がいて寝そべっている。聴いているのか、イチヤイチャしているのか、気になって仕方がない、と言いながらも、やはり生の演奏は胸に響きわたり、喝采の拍手で終わる。

外に出ると雨。

「傘いらないね」

と気になって話していたのに、やはり

「ロンドンでは傘を離せない」

と言われるのが納得できる。皆がタクシーを使うのでなかなか拾えない。雨に濡れながら場所を変えると空車が来たので乗車、ほっとひと安心し、チップを弾む。

7月23日(土)

ホテルを出てベイズウオーター(Bayswater) 駅からサークルラインで行こうとすると、駅が閉まっている。仕方なく近くのセントラル線のクイーンズウェイ駅から行く事にするが乗り継ぎを予定していた駅に止まらない。あの時、駅名の下に真っ直ぐでなく曲がりくねりの赤線が引かれていた。いたずらかと思っていたが、停車しないと言うことだったのか。アバウトな国だなあと思う。英語で書かれていたのかも知れないが。

次の乗り換え駅を探し、乗り継ぎながら地下鉄セントジェムスパーク駅で降りる。駅が閉まっていたのは、どこの駅か覚えていない。来年ここでオリンピックがあるので駅を修理しているのかな？。今まで乗れたのになあ。もっ少し待つて欲しかった。

池に架かる橋を渡りバッキンガム宮殿に着くと、すで

に沢山の人が並んでいる。今、ネットで予約すると宮殿内部を見ることが出来る。我々は日本で済ませている。入る前にトイレに行きたいと言うが無い。何か食べてトイレを借りようと駄の方に戻り、トイレが借りられるか尋ね小さな店に入った。すぐ早い昼食を済ませる。

宮殿に戻ると皆が並んでいるので私たちも後ろに並ぶと、係員が来てネットの券を見て向こうの場所からと言われる。3か所入れるらしい。最初の所は、今まで使用した馬車が並べられている。この中の1台は乗り心地が悪く余り使われなかったと言う。馬屋には白馬がつながれ気品を漂わせている。

二箇所目の建物には、絵画や時計、壺などが沢山置かれている。どれも高価な物のようだ。写真を撮り、土産売り場の横で次の時間待ちをしていると、同じように待っていた男性の所に子供づれの女性が来てワインを見せた。その男性はワインのラベルを眺めてから奥さんを抱き寄せキスをした。外国人は感情表現が大げさで、人目を気にしない人種なのだなあ。恥ずかしく無いのかな。私が恥ずかしくなる。

最後にバックingham宮殿の内部へ厳しい警備体制で入る。最初に案内されたのは、お客さんを迎える赤い絨緞

の敷かれた玄関。

ここから入れた日本人は今までに何人いて、どんな人物だろうか。私たちは横から見ただけで通れない。

内部は撮影禁止を知らず玄関部分を写してしまった。

食堂の壁や食器は薄い色で気品高くて綺麗だ。ここで食べるのは緊張するだろうな。すべての物が豪華絢爛で王室の力を見せつけているように思える。

『羨ましいと言うより住む世界が違っただけだ。やせ我慢かも知れないが、窮屈な生活より今の自由な生活が良いかなと思う。内部の写真が撮れないので裏庭で記念写真を撮影し宮殿を出る。』

ピカデリーライン (Piccadilly) でナイツブリッジ (Knightsbridge) へ。道もハロッズの見たいコーナーも人で混雑。家のお隣りに頼まれた紅茶と大きいクマのぬいぐるみがほしい。しかし私好みの大きいクマがハロッズに無く諦めて結局ティだけを買った。

ホテルにはバスで帰る事にしたが 聞いたことも無い



駅に着き、そこからのように帰ったか覚えていない。
バスの中にいた日本人の女性に、このバス停だといわれ
降りた。

7月24日(日)

ロンドンから日帰りでウインザー城 (Windsor Castle)
へ。国鉄・パディントン駅から列車に乗りスラウ駅
(Slough)で乗り替える。一番端のホームの2両の列車が
ウインザー&イートンセントラル駅 (Windsor Eton
Riverside)行。ウインザー駅に着くとお召列車が飾られ、
駅から数歩で城の前。女王の像が迎えてくれる。女王が
滞在の時は旗が掲げられるという。

石造りのタワーに行き庭を眺め、クイーン・メアリー
人形館でドールハウスを見学。私も紙粘土で人形を作っ
ているが、見事なミニチュアが展示されている。次々奥
に進むと、家具、調度品、美術品の高級品が並べられて
いる。イギリスの富豪は桁違いのお金持ちだと聞してい
る。王室はそれ以上に財産を維持しているからね。

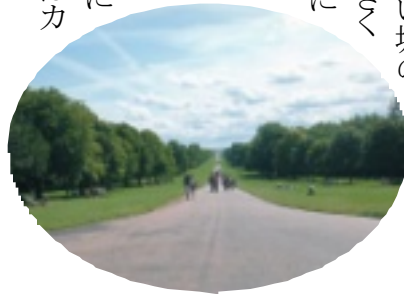
外に出ると、衛兵が城を見回っている。銃を掲げ顔を
真直ぐにしてキビキビと歩く姿は、やはりカッコいい。
しかし、あの姿で走れるのか。実際に銃を撃つ事が出来

るのだろうか。

聖ジョージズ教会は休館だが、ミサに参加できるので
はと思い夕方まで待つことにする。

時間があるので以前に見ていない城の
南のロングウォークに行く。大きく

真直ぐな長い遊歩道で両脇は林に
なっている。向こうの端が見え
ないほど長いロングウォークの
芝生に我々は座り、フルーツと
菓子でランチにする。昼食は、
いつも、こんな物で済ませるのに
痩せない。やはり海外の食事はカ
ロリーが高いのかな。



駅の方に戻りウインザー橋を渡ると10年前にはなかつ
たゴンドラが見える。イートンの街のハイストリートは
アンティーク店やティールームが並ぶ。店に色々な色鮮や
かにそめられたケーキ並ぶ。日本では考えられない。

その道を1Kほど行くとイートン校 (Eton College) が
ある。内部の見学をお願いしたが入れない。工事のよう
でした。此処の売店で売っている燕尾服を着た人形のバッ

ジを買いたいが駄目だった。

その後長く待った甲斐もなく結局ミサには参加できなかった。駅近くの店でまずいローストビーフの夕食を済ませ、帰途に就いた。

7月25日(月)

リトル・ヴェニスと言われている運河のナローウボートに乗りに行くことにする。ホテルからバスに乗ろうとカードをタッチする。私はすんなり乗れたが、友がタッチするとブザーがなる。何度タッチしても同じで、とうとうバスから降ろされた。パディントン駅まで歩き駅のカード機に試しにタッチ。今度は私のカードも駄目だ。1週間乗り放題の期限が1日すぎていた。駅で1日追加のお金を払う。

地下鉄ベイカール線に乗りワリック・アベニュー駅 (Warwick Avenue) で降り、徒歩3分でナローボート乗り場に着いた。細長い船には子ども連れの家族が沢山乗り出発。切符を売りに来たのでリージェンツパークまでを買い、値段が本に書いていたのと違い高い。本

に書いている値段を見せたが、日本語で書かれているから解らないのが当然よね。しばらくして友が、ロンドン動物園の入場料金も含まれていると言う。カムデンロック (Camden Lock) の終点までの切符を買い。その分を返金してくれた。

「良く気がついたね」

乗船から次の終点まで50分、狭い川を進むが余り水は綺麗ではない。

カムデンロックに着くと、どこの国に来たのかと驚く。インド系、中国系の店員がいて食べ物、衣類、おもちゃ、雑貨などの屋台や家並みが並んでいる。これが移民問題で悩むイギリスやフランスの実態なのか。ホリデイ・イン・ロンドン・ホテルでトイレを借り、人が多くて早々に引き揚げようと、ここから乗れる列車でエンバンクマで乗る。

デイストリクト線に乗りテンプル (Temple) で降り、ダヴィンチコードの映画が撮影された教会テンプルを目出す。尋ねると前の大きな建物を指さす、中に入ると広いホールの廻りに小さな部屋が並んでいる。二階に上がると喫茶コーナーがある。お茶をして聞いてみることに

する。

「ダビンチ コード ムービー」

と言うと映画館を教えてくれる。

「Thank you」

と言いながらも

「判っていないわ」

と2人でつぶやく。自分の英語が

出来ないのを棚に上げて……



下のロビーに行くくと面白い格好をした男性。その人は

カールした白い毛の鬘をかぶっていて昔の音楽家のよう

だ。鬘の下から本物の髪の毛が見えていて笑えて来る。

撮影したいが撮影禁止の看板がある。ここがあの撮影現

場かなと思いつながら外に出ると、日本人のご夫婦が歩い

てきたので声をかける。

ここは教会ではなく裁判所で、裁判の時は鬘をかぶる

のだと言う。何のために昔の格好をするのか。

「アホかいな。」

2013年コマーシャルで嵐の、一宮君が白い鬘をか

ぶつて裁判の場面が出てきて本当なのだと解る。

この辺はデンプルという地名で、ここの大通りの真ん

中に立つ像がロンドン市内との境だと説明を聞く。

それから細い路地を入り教会まで案内して頂いた。小さな教会で質素。内部に世界大戦を忘れないための記念盤がある。

映画の場所はここだつ

たかな。どんな場面であつ

たか覚えていない。日本

に帰り映画を見なおそう。

映画「ダビンチ コー

ド」は日本でのタイトル

なのかもしれない。

そこを出てトラファルガーの方向に進むと黒い服を着

たドアーマンが待つ高級感を漂わせたホテル・サヴォイ

(The Savoy) が見えた。

「ふふん。テレビで見たホテルだわ」

ここに日本人コンセルジュがいて取れないチケットでも

用意するというホテルか？



私たちはイギリス最後の夕食に、トラファルガーの見

えるイタリア料理店でスパゲッティとピザを食べた。普

通イギリスに来たからには、この国の料理にするのが本

当なのだろうが、そして、もう少し高級な食事にすれば

良かったのに、と帰ってから思う。全く思いつかなかったし店も調べなかった。

イギリス旅行第一日目もトラファルガー通りの向こう側の店だったなど不思議な気がする。泣いても笑っても明日で終わり。感慨無量で食事を済ます。

7月26日（火）

朝ケンジントン公園に最後の別れの観光に出かけ色々のポーズで撮影。この旅の始まりもこの公園だった。

空港から最初の駅、また何処に行くにも便利、そして安いホテルが有る。パディントンでのホテルを取ったから「ケンジントンに始まりケンジントンで終わる旅」になった。



後ろ髪惹かれる思いで早めに空港に出掛け、免税店で買い物。長いようで短い一か月の「わくわく旅」に幕を下ろし帰国の途につく。



私たちは、健康にも恵まれ、雨にあったのは2日位でほとんどが快晴？という天候にも恵まれて、車の事故に合うこともなく、計画通りホテルに行き、つつがなく旅をしてこれたのは、道中で出会えたイギリスの方々、またイギリス在住の日本人の方々の思いやりのある親切な手助けのお蔭。私たちだけで自由にイギリスを旅したのを知った人は英語が出来るのだと思っているが、本当に話せない、理解できない2人です。それでも旅行が出来たのです。この本で判かったと思います。無謀だったかも知れませんが、恐れを考えず、無知であったから行けたのだと思う。もちろん綿密な計画を立て 구글マップを開いて勉強をした。知り合いの、イギリスにいる方にお世話になるかもと連絡先も聞いた。やはり私たちの致命傷は英語が出来ないということでした。

私の文章を書く能力は浅く読みづらい事もあったと思いますが、思いのままを書いてみました。厚かましく文章の構成をお願いしたのを快く受けていただき、本の完成までになりました。皆様のおかげです。心からの感謝を表します。本当にありがとうございました。



